

## 南相馬市内遺跡発掘調査報告書16

### —令和3年度試掘調査報告—

羽山岳の木戸跡	(3次調査)
萱浜原畑遺跡	(4次調査)
片草南原遺跡	(4次調査)
羽山B遺跡	
松ヶ沢A遺跡	(2次調査)
白幡前遺跡	(3次調査)
真野古墳群B地区	(3次調査)
高見町B遺跡	(7次調査)
東町遺跡	(5次調査)
八幡林遺跡	(20次調査)
荒神前遺跡	(10次調査)
北原貝塚	(2次調査)
北原田B遺跡	
長野南原遺跡	(4次調査)
西迫東迫横穴墓群	
反町遺跡	

令和5年3月  
南相馬市教育委員会



## 南相馬市内遺跡発掘調査報告書16

### —令和3年度試掘調査報告—

羽山岳の木戸跡	(3次調査)
萱浜原畑遺跡	(4次調査)
片草南原遺跡	(4次調査)
羽山B遺跡	
松ヶ沢A遺跡	(2次調査)
白幡前遺跡	(3次調査)
真野古墳群B地区	(3次調査)
高見町B遺跡	(7次調査)
東町遺跡	(5次調査)
八幡林遺跡	(20次調査)
荒神前遺跡	(10次調査)
北原貝塚	(2次調査)
北原田B遺跡	
長野南原遺跡	(4次調査)
西迫東迫横穴墓群	
反町遺跡	

令和5年3月  
南相馬市教育委員会



## 序 文

令和3年(2021)は、平成23年(2011)3月11日に発生した東日本大震災から10年目の節目の年を向かえることとなりました。地震発生当時は小学生であった児童達も成人となり、それぞれに大きな希望を胸に社会の一員となるまでの月日が流れました。

この間、岩手県・宮城県・福島県の被災三県では、震災復興のためにさまざまな事業がおこなわれ、徐々にかつての故郷の姿を取り戻しつつありますが、東日本大震災が社会や人々の心に残した大きな傷跡は完全に癒されることはなく、10年が経過した今日でも各地で懸命に復興に向けた取り組みが行われています。

本書は、このような状況のなか、令和3年度に文部科学省の補助金の採択を受け、南相馬市内で実施された埋蔵文化財発掘調査の成果報告書です。令和3年度に南相馬市内で計画された各種開発事業の内容をみると、東日本大震災からの復興にともなう開発事業は姿を消し、埋蔵文化財保護の面では震災前の落ち着きを取り戻しつつあります。

埋蔵文化財をはじめとする地域に残る文化財は、我が国の長い歴史の中で生まれ、今日まで守り伝えられてきた国民共有の財産であるとともに、その地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであり、将来の文化の向上や発展、そして地域のアイデンティティー形成の根幹をなすものであります。

これらの埋蔵文化財の発掘調査の成果が、文化財の保護や地域研究、更には東日本大震災で被災され方々の目に触れ、震災を経験した南相馬市の復興の礎として活用されることを祈念します。

終わりに、令和3年度に実施した発掘調査にご協力賜りました地権者の皆様、ならびに関係機関の皆様、加えて震災復旧、復興にご支援、ご尽力頂きました皆様に、心から感謝申し上げます、序文のあいさついたします。

令和5年3月

南相馬市教育委員会  
教育長 大和田 博行



## 例 言

1. 本書に記載した内容は、令和3年度に南相馬市教育委員会が実施した、南相馬市内の埋蔵文化財試掘調査の成果報告である。
2. 試掘調査等にかかる経費は、文部科学省の補助金の採択を得て実施した。

3. 試掘調査ならびに報告書刊行は、以下の体制で実施した。

- ・調査期間 令和3年4月1日～令和4年3月31日
- ・整理期間 令和3年4月1日～令和5年3月31日
- ・調査主体 南相馬市教育委員会

事務局：南相馬市教育委員会文化財課

### 【令和3年度】

教 育 長	大和田 博行	主任文化財主事	藤 木 海
事 務 局 長	午 来 学	主任文化財主事	佐 川 久
文 化 財 課 長	鈴木 悦子	主任文化財主事	佐藤 友之
課長補佐兼文化財係長	齋藤 直之	埋蔵文化財調査員	濱 須 脩
埋蔵文化財担当係長	川 田 強	会計任用職員	山 田 恵子

### 【令和4年度】

教 育 長	大和田 博行	主任文化財主事	藤 木 海
事 務 局 長	鎌田 由光	主任文化財主事	荒 淑 人
文 化 財 課 長	鈴木 悦子	主任文化財主事	佐藤 友之
課長補佐兼文化財係長	齋藤 直之	主 事	笠 岡 良之
埋蔵文化財担当係長	川 田 強	文 化 財 主 事	杉 浦 弘佳
		会計任用職員	山 田 恵子
整理補助員	泉田 あずさ・岩崎 美和子・土屋 和美・寺島 千尋・山本 樹里		

4. 発掘調査に際しては、次の機関及び個人から協力を得た。記して感謝の意を申し上げる。

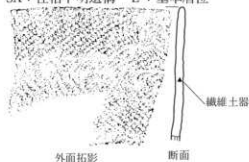
文化庁・福島県教育委員会・株式会社 Soma Clean Energy・株式会社ふくしまエナジー・株式会社アイダ設計・株式会社アーネストワン・有限会社カネタ菅波・株式会社泉田組・株式会社 GREAT・社会福祉法人竹水会・遠藤一夫・遠藤美喜雄・大井一善・川島敏範・小林ユキ子・小林寛明・坂本和江・佐藤貴之・佐藤浩尚・鈴木直子・鈴木重信・羽山勝治・原内トシ子・古川純・門馬広毅

5. 本報告書に掲載した文章ならびに挿図・写真図版の作成は川田・荒が行い、最終的な編集は荒が行った。
6. 調査で得られた資料は、南相馬市教育委員会が保管している。

## 凡 例

1. 図中の方位は真北方向を示し、水系レベルは海拔高度を示す。
2. 本文並びに図作成に使用した記号・略号は、以下の内容を示す。

T：トレンチ SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SI：竪穴住居跡 SK：土坑 P：ピット  
SX：性格不明遺構 L：基本層位





# 目次

序文	i
例言	iii
凡例	iv
目次	v
挿図目次	vi
写真目次	vi
<b>第I章 南相馬市を取り巻く環境</b>	<b>1</b>
第1節 遺跡を取り巻く環境	1
第1項 地理的環境	1
第2項 歴史的環境	1
<b>第II章 調査に至る経過</b>	<b>7</b>
第1節 調査に至る経過	7
第1項 令和3年度試掘調査の経過	7
<b>第III章 調査成果</b>	<b>11</b>
第1節 令和3年度試掘調査成果	11
第1項 羽山岳の木戸跡(3次調査)	11
第2項 萱浜原畑遺跡(4次調査)	23
第3項 羽山B遺跡	24
第4項 片草南原遺跡(4次調査)	25
第5項 松ヶ沢A遺跡(2次調査)	26
第6項 白幡前遺跡(3次調査)	28
第7項 真野古墳群B地区(3次調査)	29
第8項 高見町B遺跡(7次調査)	30
第9項 東町遺跡(5次調査)	31
第10項 八幡林遺跡(20次調査)	32
第11項 荒神前遺跡(10次調査)	36
第12項 北原貝塚(6次調査)	37
第13項 長野南原遺跡(5次調査)	55
第14項 北原田B遺跡	58
第15項 西迫東迫横穴墓群	59
第16項 反町遺跡	62

報告書抄録  
奥付

## 挿図目次

図1	南相馬市位置図	1	図28	調査区位置図	31
図2	主要遺跡位置図	6	図29	八幡林遺跡位置図	32
図3	令和3年度試掘調査位置図	10	図30	調査区位置図	32
図4	羽山岳の木戸跡位置図	11	図31	古墳分布図	33
図5	測量範囲位置図	11	図32	荒神前遺跡位置図	36
図6	石垣部平面図	12	図33	調査区位置図	36
図7	石垣部平面図	13	図34	北原貝塚位置図	37
図8	石垣部立面図(北面)	14	図35	北原貝塚調査場所図面	38
図9	石垣部立面図(東面)	15	図36	北原貝塚調査場所図面	39
図10	石垣部立面図(南面)	16	図37	北原貝塚調査断面図(1)	40
図11	修復範囲図	17	図38	北原貝塚調査断面図(2)	41
図12	断面図	19	図39	北原貝塚出土遺物(1)	43
図13	菅浜原遺跡位置図	23	図40	北原貝塚出土遺物(2)	44
図14	調査区位置図	23	図41	北原貝塚出土遺物(3)	45
図15	羽山B遺跡位置図	24	図42	北原貝塚出土遺物(4)	46
図16	調査区位置図	24	図43	北原貝塚出土遺物(5)	47
図17	片草南原遺跡位置図	25	図44	長野南原遺跡位置図	55
図18	調査区位置図	25	図45	調査区位置図	55
図19	松ヶ沢A遺跡位置図	26	図46	遺構配置図	56
図20	調査区・遺構分布図	26	図47	北原田B遺跡位置図	58
図21	白幡前遺跡位置図	28	図48	調査区位置図	58
図22	調査区位置図	28	図49	西迫東迫横穴墓群位置図	59
図23	真野古墳群B地区位置図	29	図50	調査区位置図	59
図24	調査区位置図	29	図51	横穴墓分布図	59
図25	高見町B遺跡位置図	30	図52	反町遺跡位置図	62
図26	調査区位置図	30	図53	調査区位置図	62
図27	東町遺跡位置図	31			

## 写真目次

写真1	宮城県沖地震被害状況(東面)	20	写真16	掘削作業完了状況2	21
写真2	宮城県沖地震被害状況(東面)	20	写真17	応急措置状況	22
写真3	宮城県沖地震被害状況(南面)	20	写真18	復元作業状況1	22
写真4	宮城県沖地震被害状況(北面)	20	写真19	復元作業状況2	22
写真5	石取り上げ後状況1	20	写真20	復元作業状況3	22
写真6	石取り上げ後状況2	20	写真21	復元作業状況4	22
写真7	石取り上げ後状況3	20	写真22	復元完了(南面)	22
写真8	石取り上げ後状況4	20	写真23	復元完了(北面)	22
写真9	調査状況1	21	写真24	復元完了(東・北面)	22
写真10	調査状況2	21	写真25	1T調査状況	23
写真11	土手断面(E-F)1	21	写真26	土層断面	23
写真12	土手断面(E-F)2	21	写真27	1G調査状況	24
写真13	土手断面(G-H)1	21	写真28	2G調査状況	24
写真14	土手断面(G-H)2	21	写真29	調査状況	25
写真15	掘削作業完了状況1	21	写真30	土層断面	25

写真31	27 T 廃滓場南端	27	写真64	18T 南側壁面堆積状況(2)	49
写真32	28 T 廃滓場西端	27	写真65	18T 遺物出土状況(1)	49
写真33	31 T 廃滓場中央	27	写真66	18T 遺物出土状況(2)	49
写真34	30 T 廃滓場北端	27	写真67	22T 全景(西から)	49
写真35	39 T 木炭焼成土坑検出状況	27	写真68	23 T (西から)	49
写真36	39 T 木炭焼成土坑完掘状況	27	写真69	25T 全景(東から)	49
写真37	調査状況	28	写真70	出土遺物(1)	50
写真38	土層断面	28	写真71	出土遺物(2)	51
写真39	1T 調査状況	29	写真72	出土遺物(3)	52
写真40	2T 調査状況	29	写真73	調査区遠景	55
写真41	1T 調査状況	30	写真74	重機掘削状況	55
写真42	2T 調査状況	30	写真75	3T 調査状況	57
写真43	調査状況	31	写真76	12T 調査状況	57
写真44	土層断面	31	写真77	3T 土層断面	57
写真45	1T (1号墳) 調査状況	34	写真78	12T 土層断面	57
写真46	2T (1号墳) 調査状況	34	写真79	1T 調査状況	57
写真47	3T (3号墳) 調査状況	34	写真80	14T 調査状況	57
写真48	5T (3号墳) 調査状況	34	写真81	1T 調査状況	58
写真49	7T (2号墳) 調査状況	35	写真82	2T 調査状況	58
写真50	15T (2号墳) 調査状況	35	写真83	1T 調査状況	60
写真51	9T (4号墳) 調査状況	35	写真84	1号墓検出状況	60
写真52	11T (5号墳) 調査状況	35	写真85	3T 調査状況	60
写真53	16T (5号墳) 調査状況	35	写真86	3号墓検出状況	60
写真54	作業風景	35	写真87	5号墓前庭部検出状況	60
写真55	1T 調査状況	36	写真88	10号墓開口状況	61
写真56	土層断面	36	写真89	10号墓前庭部	61
写真57	17T 全景(西から)	48	写真90	12T 調査状況	61
写真58	17T 北側壁面堆積状況(西から)	48	写真91	10T 基本土層	61
写真59	17T 北側壁面堆積状況(東から)	48	写真92	作業風景	61
写真60	21 T 全景(東から)	48	写真93	作業風景	61
写真61	18T 全景(東から)	48	写真94	1T 調査状況	62
写真62	18T 全景(西から)	49	写真95	2T 調査状況	62
写真63	18T 南側壁面堆積状況(1)	49			



## 第1章 南相馬市を取り巻く環境

### 第1節 遺跡を取り巻く環境

#### 第1項 地理的環境

福島県南相馬市は、福島県太平洋岸の中央部やや北寄りに位置する。行政境としては、北側は相馬市、南側は双葉郡浪江町、西側は相馬郡飯館村と接する。

浜通り地方の地質は、阿武隈高地東縁部と浜通り低地帯、双葉断層（岩沼－久之浜構造線）により明瞭に区分される。

市内の地形を見ると、西部域に南北方向に連なる阿武隈高地が縦走り、そこから太平洋に向かって派生する低丘陵と丘陵間に開析された沖積平野で構成され、阿武隈高地にかかる西側の丘陵の標高は100～150mを測り、海岸部に近い市内中心付近では標高50～60m前後、海岸部では20～30mとなる。



図1 南相馬市位置図

#### 第2項 歴史的環境

本項では、南相馬市内に所在する埋蔵文化財のうち、概要の判明しているものを時代の古い順から記載して、市内の歴史的環境を概観する。

まず、南相馬市内に所在する旧石器時代の遺跡としては、荻原遺跡（1）・大谷地遺跡（2）・高松遺跡（3）・西町遺跡（4）・橋本町A遺跡（5）・橋本町B遺跡（6）・陣ヶ崎A遺跡（7）・押釜前田遺跡（8）・滝ノ原遺跡（9）・石倉遺跡（10）・熊下遺跡（11）・畦原A遺跡（12）・四ッ栗遺跡（13）・広谷地遺跡（14）の14遺跡で旧石器時代の遺物が出土・採集されている。

このうち、代表的な旧石器時代の遺跡としては、小高川の支流である北鳩原川と大穴川により開析された丘陵の東端にある荻原遺跡がある。荻原遺跡では中位第Ⅱ段丘面から8カ所の石器集中部が確認され、荻原Ⅰ石器群と荻原Ⅱ石器群が設定された。これまでの4次に渡る調査では171点の資料が得られており、ナイフ形石器・刃部磨製石斧・彫器・楔形石器・二次加工のある剥片・微細剥離のある剥片・削片・破片・石核などが認められ、これらは始良Tn火山灰の（AT）の可能性のあるバブル型火山ガラスの直下から出土し、基部加工のナイフ形石器と刃部磨製石斧に代表される石器群であることから、後期旧石器時代前半頃の新しい時期に位置づけられている。そのほか四ッ栗遺跡や広谷地遺跡の発掘調査において石刃などの旧石器が出土している。

上記以外の遺跡で得られた旧石器は、いずれも竹島國基氏をはじめとする地域の研究者の表

面採集によるもので、ナイフ形石器、彫刻刀形石器、尖頭器、石核、エンドスクレイパー石刃などがある。これらの石器に使用された石材は、おもに珪質頁岩が多く、前田遺跡の彫刻刀形石器は神山型、石倉遺跡の彫刻刀形石器は小坂型との類似点が認められることから、後期旧石器時代後半段階のもので、荻原遺跡出土石器よりもやや新しい時期のものが多い。

縄文時代になると遺跡の数が増加し、山間部から平野部までの河川流域で縄文時代早期から晩期までの各時期の遺跡が確認されている。特に小高川流域、井田川・宮田川流域では片草貝塚(15)・加賀後貝塚(16)・北原貝塚(17)・浦尻貝塚(18)・角部内南台貝塚(19)・宮田貝塚(20)・小谷津貝塚(21)など貝塚をともなう集落が確認されている。

これらの貝塚のなかでも、国史跡浦尻貝塚と北原貝塚は、かつての井田川浦南側の台地上に営まれた貝塚をともなう集落である。浦尻貝塚の貝層は南台・台ノ前・西向・小迫地区の4地点に分布し、前期後葉から晩期までの各時期の貝層が確認されている。出土資料の中には早期末葉から前期前葉の資料を少量含むものの、貝塚が本格的に形成され始めるのは前期後葉の大木3・4式期にあり、集落の形成は大木1・2式土器を主体とする北原貝塚から浦尻貝塚に移行した可能性がある。大木5・6式段階には再び北原貝塚において積極的な貝塚の形成が見られ、浦尻貝塚と北原貝塚における集落の形成には密接な関係があった可能性が高い。

縄文時代中期には、宮後A遺跡(22)・宮後B遺跡(23)・八幡林遺跡(24)・押釜前田遺跡(8)・東町遺跡(25)・高松遺跡(27)・吉名中坪遺跡(28)などで調査が行われている。真野川上流域にある宮後B遺跡からは、敷石をともなう竪穴住居跡から、大木10式期の土器に人体を表現したような文様を持つ壺が出土している。東町遺跡では大木8b～10式期の竪穴住居跡32軒が幾重にも重複する状態で確認されており、新田川下流域の中心的な集落遺跡であったことが確認されている。

縄文時代後期の遺跡としては、真野川と上真野川が合流する沖積低地に隣接して立地する、中才遺跡(29)・鷺内遺跡(30)から製塩土器とともに編組製品が出土している。とくに鷺内遺跡の低地性土坑からは合計19点の編組製品が出土し、このなかにはオニグルミを収納した状態のカゴ製品が出土している点は特筆される。太田川流域にある上ノ内遺跡(31)・町川原遺跡(32)からは網取式土器が多量に出土している。

縄文時代晩期の遺跡の調査は多くないが、片倉の羽山遺跡(33)では晩期の大洞C1～A式、高見町A遺跡(34)では晩期中葉の土器と石囲炉をもつ住居跡が調査されている。

弥生時代に位置づけられる遺跡の調査は少なく、確実に前期に位置づけられる集落は確認されていない。当該期の遺跡が増加するのが中期段階からで、桜井古墳(35)や川内垣B遺跡群F地点(36)では中期中葉の榎形罎式が出土し、市内の沖積地に発達した微高地にある中島館跡(37)・仲沖遺跡(38)や低丘陵上からは、中期後葉に位置づけられる桜井式土器が出土しており、中期後葉段階の集落の立地が多様であったことがうかがえる。また、桜井遺跡群や天神沢遺跡(39)は、桜井式期の石庖丁や磨製石斧・打製石器が多量に採集されたことで著名である。

弥生時代後期から終末期には、北関東の太平洋側に分布する十王台式土器や天王山式土器を

出土する遺跡が散見されるが、その詳細な内容が判明している調査例はまだない。

古墳時代では、古墳時代前期に新田川流域にある荒井前遺跡(40)で方形周溝墓の造営がはじまり、続いて河岸段丘上に国史跡桜井古墳(35)と桜井古墳群上洪佐支群7号墳(41)が築造される。桜井古墳は墳丘主軸長約75mを計測する大型の前方後方墳で、墳長平坦面の2ヶ所に木棺の腐朽による陥没坑が確認され、上洪佐支群7号墳では二段墓壇の内部に組み合わせ式木棺を直葬し、布で包まれた仿製珠文鏡が木箱に治められた状態で出土している。その他に真野川流域の柚原古墳群(42)・小高流域の欽請内古墳(43)が埴釜式土器を出土する古墳群である。真野川下流域の低丘陵上にある永田古墳群B1号墳(44)も前期に築造された可能性のある古墳である。

八幡林遺跡(24)・高見町A遺跡(34)・高見町B遺跡(45)・東広畑B遺跡(46)・五畝田・犬這遺跡(47)・南海老南町遺跡(48)・湊遺跡(49)・梨木下西館跡(50)は、埴釜式土器を出土する主な集落遺跡であり、河岸段丘面や浜堤上に点在する形で分布している。

古墳時代中期に位置づけられる可能性のある古墳としては、太田川流域にある前方後円墳である上ノ内前田古墳(51)や、円筒埴輪をともなう真野古墳群(52)・横手古墳群B地区(53)、多量の石製模造品を出土した真野古墳群A地区49号墳や塚原古墳群(54)などは、中期後半段階まで遡る可能性のある古墳群であるが、前期から続く中期前半段階に位置づけられる首長墓は見当たらない。

この時期の集落は、真野川下流域の反町遺跡(55)・桶師屋遺跡(56)、新田川流域の前屋敷遺跡(57)・原山遺跡(58)、小高川流域の中島館跡(37)・仲沖遺跡(38)で南小泉式土器を出土する。とくに真野川流域にある反町遺跡と桶師屋遺跡は大規模な区画溝がともなうことから、豪族居館の可能性が示唆される集落である。

古墳時代後期には、河岸段丘面に立地する桜井古墳群高見町支群(59)・真野古墳群(52)・横手古墳群A地区(60)・片草古墳群(61)などで古墳群の造営が開始される。真野古墳群は、かつて小規模な前方後円墳2基を含む100基を超える規模の古墳群で、東北地方を代表する後期群集墳として著名である。そのほかには市内で最も大きな前方後円墳の与太郎内古墳群1号墳(62)や、低丘陵頂部に造営された小規模な群集墳である荷渡古墳群(63)・北山古墳群(64)・北原古墳群(65)などがある。

大六天遺跡(66)・迎畑遺跡(67)・地藏堂B遺跡(68)・片草古墳群一里段支群(69)・中村平遺跡(70)は、後期から終末期の土器を出土する集落遺跡である。

古墳時代終末期に位置づけられる古墳は、切石を用いた横穴式石室が採用された真野川流域の横手古墳群B地区1号墳が唯一で、その大部分が横穴墓となる。横穴墓のうち大窪横穴墓群(71)・羽山横穴墓群(72)・浪岩横穴墓群(73)は玄室内部に装飾壁画が見られ、真野川流域の中谷地横穴墓群(74)は複室構造の玄室を採用している。真野川流域にある大窪横穴墓群や太田川流域にある西迫横穴墓群(75)と隣接する西迫東迫横穴墓群(76)では、50基をこえる横穴墓が確認されている。発掘調査が行われた西迫横穴墓群では、3～5基程度の横穴墓が小規模なグループを形成しており、出土遺物には湖西産・猿投窯産・渥美窯産の瓶類に在地

窯産の甍が加わる器種組成が見られた。

奈良・平安時代の遺跡では、行方郡家である泉官衙遺跡（77）があり、3時期に変遷する郡庁院・正倉院と館院や水運関連施設などが確認されている。横手廃寺跡（78）・真野古城跡（79）・植松廃寺跡（80）は瓦が出土する遺跡であり、有力豪族に関連した寺院と考えられる。

入道迫瓦窯跡（81）・京塚沢瓦窯跡（82）・犬這瓦窯（83）などは官衙や寺院の瓦を焼成した窯跡である。特に京塚沢瓦窯跡は泉官衙遺跡、入道迫瓦窯跡は植松廃寺跡に瓦を供給していることが判明している。

市内の低丘陵では製鉄に関連した遺跡が多数確認されている。かつては相馬市にある武井地区製鉄遺跡群や南相馬市にある金沢製鉄遺跡群（84）などの大規模な発掘調査の成果から、現在の相馬市・南相馬市がある福島県浜通り地方北部が、律令国家における製鉄の拠点であったと評価されてきたが、近年では南相馬市の割田製鉄遺跡群（85）・蛭沢遺跡（86）・川内迫B遺跡群（87）・出口遺跡（88）・大塚遺跡（89）・横大道遺跡（90）・館腰遺跡（91）・榎木沢C遺跡（92）・東迫遺跡（93）などで調査が進展するとともに、双葉郡でも多くの製鉄遺跡が分布していることが判明しており、福島県浜通り地方全体が、当該期の一大製鉄地帯となっていたと考えられる。

集落遺跡では広畑遺跡（94）や上洪佐原田遺跡（95）・桜井D遺跡（96）・大六天遺跡（97）・町川原遺跡（31）などで、当該期の竪穴住居跡等が確認されている。このうち泉官衙遺跡に隣接する広畑遺跡からは「寺」「厨」などの墨書土器とともに灰陶器が出土し泉官衙遺跡との関連が示唆され、大六天遺跡から出土した「小穀殿千之」と刻書された須臾器は行方軍団との関わりが見られる資料である。上洪佐原田遺跡では、3時期に区分される13軒の竪穴住居跡と26棟の掘立柱建物跡が、計画的に建設されていたことが判明している。

国史跡観音堂石仏（98）・薬師堂石仏附阿弥陀堂石仏（99）は平安時代に造営されたと考えられる大規模な磨崖仏であり、古代における仏教の伝播や信仰を知るうえで貴重である。

中世の遺跡としては城館跡が挙げられ、下総国から下向した相馬氏の最初の居城となる別所館跡（100）や牛越城跡（101）・村上城跡（102）は、相馬氏に関連する城館跡として良く知られている。

小高城跡（103）は相馬氏の居城として機能した平山城である。本城跡は嘉暦元年から慶長十六年に相馬利胤が中村城を築城するまでの約290年間、相馬氏が当地方を統治するうえで重要な役割を占めた。その他では泉平館跡（104）・泉館跡（105）・下北高平館跡（106）で調査が行われている。南海老南町遺跡（48）では、多くの掘立柱建物跡が確認されており、13世紀後半から14世紀に位置づけられるカワラケが出土しており、掘立柱建物跡を主体とする集落であった可能性がある。

近世の遺構は、寛文六年以降に築かれた野馬土手と、その出入口となる木戸跡がある。野馬土手は、野馬追が執り行われる雲雀ヶ原扇状地を囲むように、東西約10km×南北約2.6kmの範囲に築かれており、土手内外の出入り口となった木戸跡のうちのひとつである羽山岳の木戸跡（107）は南相馬市指定史跡に指定され良好な形で保存されている。



近世後半から近代にかけては中村藩の大規模なたたらである馬場遺跡(108)や、多くの近世墓が正福寺跡(109)、法幢寺跡(110)などで調査されている。

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	萩原遺跡	集落・散布地	旧石器・縄文	54	桶師屋遺跡	集落	縄文・弥生・古墳・平安
2	大谷地遺跡	散布地	旧石器・縄文	55	上洪佐前屋敷遺跡	集落	縄文・古墳・平安
3	高松遺跡	集落・散布地	旧石器・縄文・弥生	56	原山遺跡	集落	古墳・奈良・平安
4	西町遺跡	散布地	旧石器	57	板井古墳群高見町支群	古墳	古墳
5	橋本町A遺跡	散布地	旧石器	58	橋手古墳群A地区	古墳	古墳
6	橋本町B遺跡	散布地	旧石器	59	片草古墳群	古墳	古墳
7	陣本崎A遺跡	集落・散布地	旧石器・縄文	60	与太郎内古墳群	古墳	古墳
8	押釜前田遺跡	集落・散布地	旧石器・縄文	61	荷渡古墳群	古墳	古墳
9	滝ノ原遺跡	集落・散布地	旧石器・縄文・弥生	62	北山古墳群	古墳	古墳
10	石倉遺跡	散布地	旧石器・縄文・弥生・古墳	63	北原古墳群	古墳	古墳
11	熊下遺跡	散布地	旧石器	64	大穴遺跡	集落	古墳・奈良・平安
12	畦原A遺跡	散布地	旧石器・縄文・奈良・平安	65	迎畑遺跡	集落	古墳・平安
13	四ヶ栗遺跡	集落・散布地	旧石器・縄文	66	地蔵堂B遺跡	集落・墳墓	古墳・近世
14	広谷地遺跡	集落・塚跡	旧石器・縄文・平安	67	中村平遺跡	集落	古墳
15	片草貝塚	貝塚	縄文	68	大窪横穴墓群	古墳	古墳
16	加賀後貝塚	貝塚・集落	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	69	羽山横穴墓群	古墳	古墳
17	北原貝塚	貝塚	縄文	70	浪岩横穴墓群	古墳	古墳
18	浦尻貝塚	貝塚・集落	縄文・平安	71	中谷地横穴墓群	古墳	古墳
19	角部内南台貝塚	貝塚・集落	縄文・平安	72	西船橋穴墓群	古墳	古墳
20	宮田貝塚	貝塚	縄文	73	西船東船橋穴墓群	古墳	古墳
21	小谷津貝塚	貝塚	縄文	74	泉官面遺跡	官面	奈良・平安
22	宮後A遺跡	集落・散布地	縄文	75	橋手尾寺跡	寺院	平安
23	宮後B遺跡	製鉄・散布地	縄文・古墳・奈良・平安	76	真野古城跡	その他	平安
24	八幡林遺跡	集落・散布地	縄文・古墳・奈良・平安	77	桶松寺跡	寺院	平安
25	東町遺跡	集落	縄文・平安	78	入道松瓦葺跡	窯跡	平安
26	吉中坪遺跡	集落・散布地	縄文・弥生・古墳	79	京塚沢瓦葺跡	窯跡	奈良・平安
27	中才遺跡	散布地	縄文	80	大這瓦葺跡	窯跡	平安
28	鷺内遺跡	集落	縄文・古墳・平安	81	金沢製鉄遺跡群	製鉄	弥生・奈良・平安
29	上ノ内遺跡	散布地	縄文	82	淵田製鉄遺跡群	製鉄	奈良・平安
30	町川原遺跡	集落	縄文・奈良・平安・近世	83	蛭沢遺跡群	製鉄	奈良・平安
31	羽山遺跡	集落・散布地	縄文	84	川内船B遺跡群	製鉄	奈良・平安
32	高見町A遺跡	集落・散布地	縄文・弥生・古墳	85	山口遺跡	製鉄	平安
33	板井古墳	古墳・散布地	弥生・古墳・平安	86	大塚遺跡	製鉄	平安
34	川内船B遺跡群F地点	散布地	弥生	87	横大道遺跡	製鉄	奈良・平安
35	中島館跡	館跡・散布地	弥生・中世	88	館腰遺跡	窯跡	奈良・平安
36	仲沖遺跡	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	89	戴木沢C遺跡	製鉄	平安
37	天神沢遺跡	散布地	弥生	90	東船遺跡	製鉄	平安
38	荒井前遺跡	集落・墳墓	古墳・奈良・平安・中世・近世	91	広畑遺跡	集落	奈良・平安
39	板井古墳群上洪佐支群	古墳	古墳	92	上洪佐原田遺跡	集落	奈良・平安
40	柚原古墳群	古墳	古墳	93	板井D遺跡	集落・散布地	古墳・奈良・平安
41	歌浦内古墳	古墳	古墳	94	観音堂石仏	石仏	平安
42	水田古墳群B	古墳	古墳	95	東船塚石仏(高野神社境内)	石仏	平安
43	高見町B遺跡	集落・散布地	弥生・古墳	96	別所館跡	城館	中世
44	東広畑B遺跡	集落・散布地	古墳・平安	97	牛越城跡	城館	中世
45	五畝田大遺跡	集落	古墳・奈良・平安	98	村上城跡	城館	中世
46	南海老南町遺跡	集落	古墳・中世	99	小高城跡	城館	中世
47	湊遺跡	集落	古墳	100	泉平館跡	城館	中世
48	蟹木下西館跡	集落	弥生・古墳・奈良・平安・中世	101	原館跡	城館	中世
49	上ノ内前田遺跡	古墳	古墳	102	下北高平館跡	城館	中世
50	真野古墳群	古墳	古墳	103	羽山岳の木戸跡	その他	近世
51	橋手古墳群B地区	古墳	古墳	104	馬場遺跡	製鉄	近世
52	塚原古墳群	古墳	古墳	105	正福寺跡	墓	近世
53	反町遺跡	古墳・平安	集落	106	法幢寺跡	墓	近世

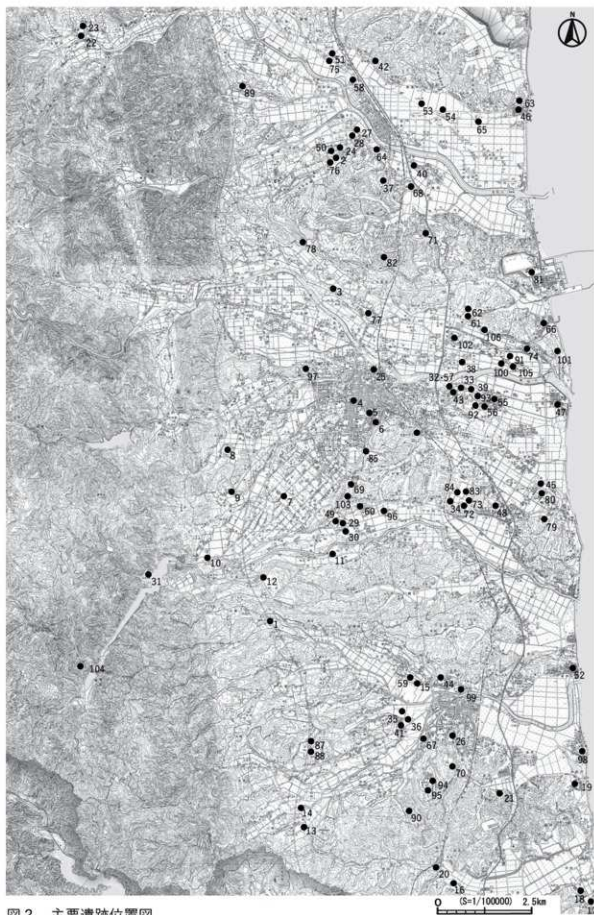


图2 主要遺跡位置图

## 第Ⅱ章 調査に至る経過

### 第1節 調査に至る経過

#### 第1項 令和3年度試掘調査の経過

羽山岳の木戸跡は江戸時代に築造された野馬原を開く野馬土手に伴う木戸跡である。昭和47（1972）年に市史跡に「羽山岳の木戸跡」として指定されている。野馬土手に伴う木戸跡としては現存する唯一のものであること、旧街道沿いにあり、石積であることから、重要視された木戸であったと考えられ、適切な保護が必要な史跡である。

これまでの調査として、平成19（2007）年に3次元測量（南相馬市教育委員会2007）、平面図作成（南相馬市教育委員会2008）が実施されている。

平成23（2011）年の東日本大震災において崩落はなかったものの、石垣のひずみが生じた。令和3（2021）年2月13日には、M7.3の2021年福島県沖地震が発生し、南相馬市原町区は震度5強を記録した。この地震により、東日本大震災により生じた石垣のひずみが拡大し、修復等の必要性が生じた。このことから、修復前の基礎データを作成することを目的に同年3月3日に改めて3次元測量を行った。

測量調査後の同年3月20日に、M6.9の宮城県沖地震が発生し、南相馬市では震度5弱を観測した。この地震により、石垣の一部は崩落した。さらに崩落の危険性があったことから、一部石の除去を早急に行った。除去の際には、崩落前の測量成果をもとに、除去する各石に番号をつけ、写真等で記録しながら行った。また、除去後はさらなる崩落を防ぐため、ロープ等での崩落防止策を行った。同年5月からは、さらに崩落の危険性がある石の除去を実施した。

また、除去に伴い、修復方針を定めるために、積土の状況を確認する目的で、土手の一部を断ち割った調査を行った。これらの調査成果をもとに、令和4（2022）年3月には南相馬市の単独の経費負担により、石垣の修復を行った。修復後、応急措置等を実施した機材や原位置に戻すことができなかった石材の撤収等を行った。

萱浜原畑遺跡4次調査は、個人住宅建設にとまない令和3年5月19日付けにて、開発予定地の試掘調査について（依頼）と埋蔵文化財発掘の届出の提出を受けて、試掘調査を実施した。令和3年6月29日付けに試掘調査の結果に基づき、福島県教育委員会に埋蔵文化財発掘の通知を進達し、令和3年7月19日付けにて福島県教育委員会から慎重工事を指示する内容の周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）が行われた。

羽山B遺跡は、令和3年5月24日付けで開発予定地の試掘調査について（依頼）に基づき試掘調査を実施した。埋蔵文化財発掘の届出は、令和3年5月24日付けにて提出され、試掘調査の結果に基づき、令和3年7月5日付けで福島県教育委員会に進達した。福島県教育委員会は令和3年7月26日付けで、工事立ち会いを指示する周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての（通知）を行った。

#### 第1項 令和3年度試掘調査の経過

片草南原遺跡4次調査は、令和3年5月25日付で開発予定地の試掘調査について（依頼）、及び埋蔵文化財発掘の届出の提出を受け、令和3年6月1日に試掘調査を実施した。埋蔵文化財発掘の届出は試掘調査の結果に基づき、令和3年7月21日付にて福島県教育委員会に進達し、福島県教育委員会は令和3年8月30日付で、慎重工事を指示する周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）を行った。

松ヶ沢A遺跡2次調査は、令和3年5月25日付で開発予定地の試掘調査について（依頼）と埋蔵文化財発掘の届出が提出されたことから試掘調査を実施し、令和3年8月1日付で試掘調査の結果に基づき埋蔵文化財発掘の届出を福島県教育委員会に進達した。福島県教育委員会は令和3年8月6日付で工事立会を指示する周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）を行った。

白幡前遺跡は令和3年6月28日付で、開発予定地の試掘調査について（依頼）が提出されたことにより、試掘調査を行った。埋蔵文化財発掘の届出は令和3年6月18日付にて提出され、試掘調査の結果に基づき福島県教育委員会に進達した。福島県教育委員会は令和3年8月27日付で周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）で、工事立会を指示する通知を行った。

真野古墳群B地区3次調査は、令和3年6月10日付にて提出された開発予定地の試掘調査について（依頼）に基づいて実施された。

高見町B遺跡7次調査は、令和3年8月2日付にて提出された開発予定地の試掘調査について（依頼）の提出に基づき、令和3年8月24日に試掘調査を実施した。埋蔵文化財発掘の届出は令和3年10月12日付にて提出され、福島県教育委員会は令和3年11月15日付にて工事立会を指示する周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）を行った。

東町遺跡5次調査は、令和3年8月7日付にて、開発予定地の試掘調査について（依頼）と埋蔵文化財発掘の届出の提出に基づいて実施した。令和3年9月1日付で試掘調査の結果に基づき埋蔵文化財発掘の届出を進達し、福島県教育委員会は令和3年9月13日付にて慎重工事を指示する埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）を行った。

八幡林遺跡20次調査は、令和3年9月7日付にて提出された開発予定地の試掘調査について（依頼）の提出に基づき実施した。

荒神前遺跡10次調査は、令和3年8月10日付にて、開発予定地の試掘調査について（依頼）の提出、令和3年10月25日付にて埋蔵文化財発掘の届出が提出されたことから実施した。令和3年11月19日付にて、試掘調査の結果に基づき福島県教育委員会に埋蔵文化財発掘の届出を進達した。福島県教育委員会は令和3年11月26日付で慎重工事を指示する周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）を行った。

長野南原遺跡4次調査は、令和3年8月31日付にて、開発予定地の試掘調査について（依頼）が提出された。当該計画地は農地であったことから、令和3年9月24日付にて農地法第5条第1項に基づく農地一時転用許可申請を提出した。農地一時転用は令和3年10月15日付で許可され、令和3年12月から試掘調査を実施し、令和4年1月19日付にて農地転用事業の工事

進捗状況（完了）を提出した。

北原田B遺跡は、令和3年11月16日付にて、開発予定地の試掘調査について（依頼）の提出を受けて実施した。埋蔵文化財発掘の届出は、令和3年12月8日付にて提出され、試掘調査の結果に基づき令和4年1月5日付にて、福島県教育委員会に進達を行った。福島県教育委員会は令和4年1月11日付にて慎重工事を指示する周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）を行った。

北原貝塚は、これまでに自然崩落に伴う1次調査（小高町教育委員会2004）などの調査が実施されている。貝層の一部は昭和46（1971）年に小高町指定史跡（現南相馬市指定史跡）に指定されている。

今回の試掘調査は、令和3年度に福島県教育委員会が実施した調査（福島県教育委員会2023）の追加調査である。福島県教育委員会の令和3年度調査では、遺跡の西側斜面について、縄文時代の遺物包含層等を確認し、要保存範囲が設定された（図35）。当調査において検出された遺物包含層等は、1次調査地点において確認した縄文時代前期の貝層との関連も考えられ、隣接する国史跡浦尻貝塚の前段階の形成であること、貝層の一部は市史跡に指定されているから、将来にわたり指定等の措置により保存を要する可能性も想定された。しかし、この調査では遺物包含層の厚さ、内容等について十分確認するまでは至らなかった。また、要保存範囲隣接する要試掘調査区域があり、早急な保存協議を行う上で、十分な情報量が不足していた。このことから、相双建設事務所、福島県教育委員会と協議したところ、南相馬市教育委員会で、追加の保存協議資料を得るための調査を実施することとなった。

西迫東迫横穴墓群については、令和4年1月5日付にて開発予定地における試掘調査について（依頼）の提出を受けて実施し、令和4年2月17日付にて開発予定地の埋蔵文化財試掘調査の結果について（中間報告）を提出した。

反町遺跡は令和4年2月7日付にて開発予定地の試掘調査について（依頼）の提出に基づき実施した。埋蔵文化財発掘の通知は、令和4年11月11日付にて提出され、試掘調査の結果に基づき令和4年11月21日付にて福島県教育委員会に進達した。福島県教育委員会は、令和4年11月29日付で工事立会を指示する周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）を行った。

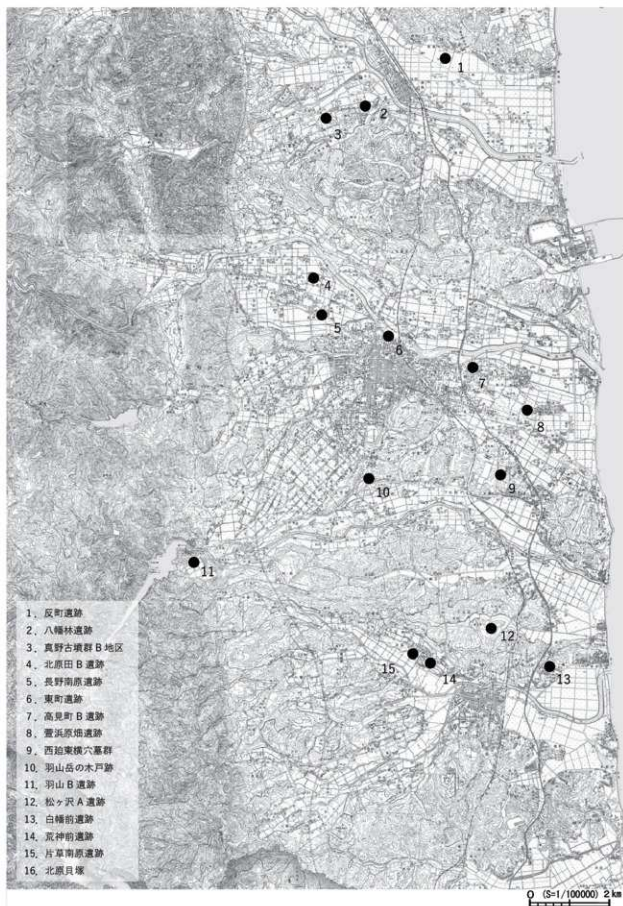


図3 令和3年度試掘調査位置図

## 第III章 調査成果

### 第1節 令和3年度試掘調査成果

#### 第1項 羽山岳の木戸跡（3次調査）

1. 調査原因 自然崩落
2. 調査地点 南相馬市原町区上太田字新橋
3. 調査期間 令和3年3月3日、令和3年5月17日～5月31日、  
令和4年3月9日～3月11日

4. 調査面積 12㎡

#### 5. 調査担当

課長補佐兼埋蔵文化財担当係長 川田強  
主任文化財主事 佐川久  
埋蔵文化財調査員 濱須節

#### 6. 調査成果

野馬土手は当該部分では街道に沿って南北に延伸していたものが、木戸周辺で東側にゆるく屈曲し、東側の現道に直行するように構築されている。石垣は北面では約11m、南面では約2m確認される。ただし、北面では西側約2mは石垣が残存せず、裏込め石のみ認められる。石垣は落とし積みで構築されており、石材は自然石のほか、一部を荒く調整し、面を抽出するなど加工された石材も多い。

石垣部は東端で上端幅2.7m、下端幅3.1m、高さ1.4mを図る。野馬土手の断面形は通常、上端幅1.8m、下端幅5.4m、高さが1.8mであり、左右非対称である。一方、羽山岳の木戸跡の石垣部は幅がせまく、高さが低い。断面形も左右対称の台形を呈するなど、通常の野馬土手と形状は大きく異なる。ただし、本調査地点の南側は建物等により土手を壊している部分が大きいと考えられ、SPC-Dの断面形では石垣面の反対側とな



図4 羽山岳の木戸跡位置図



図5 測量範囲位置図

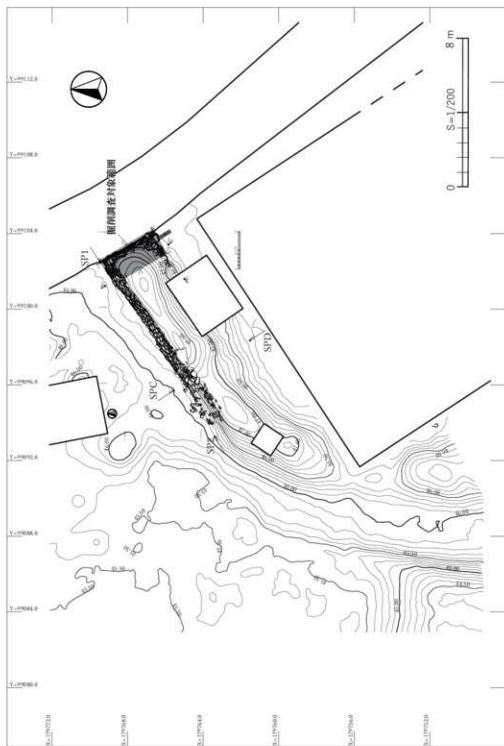


図6 石垣部平面図



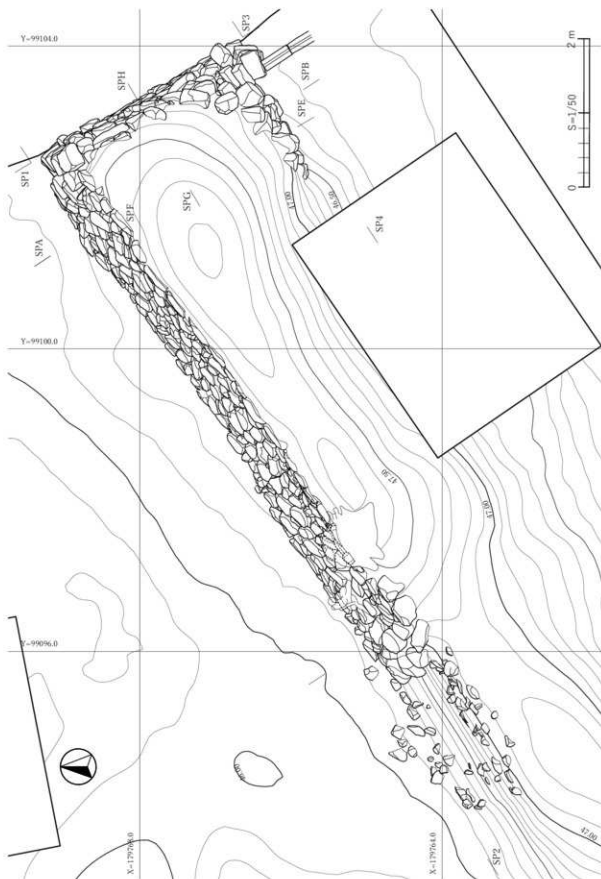
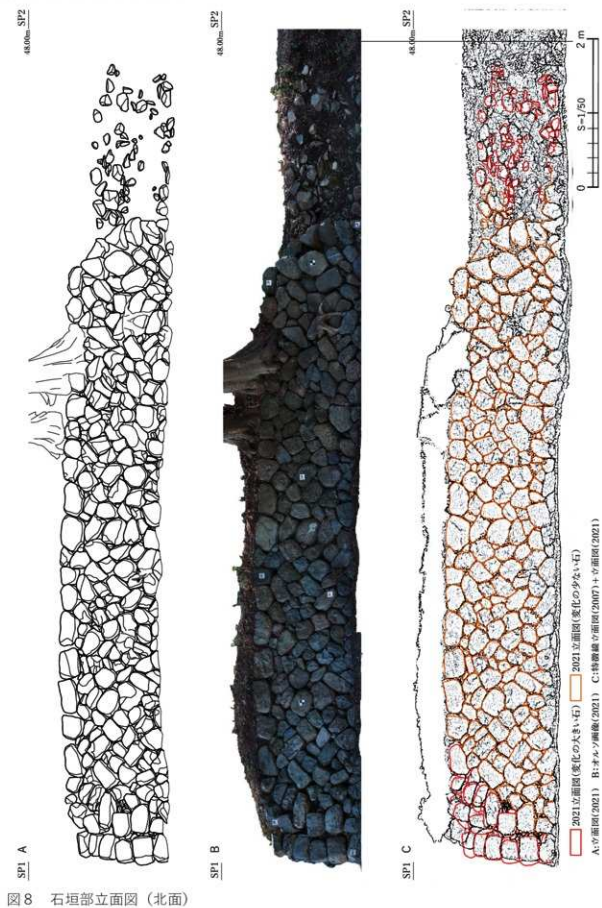


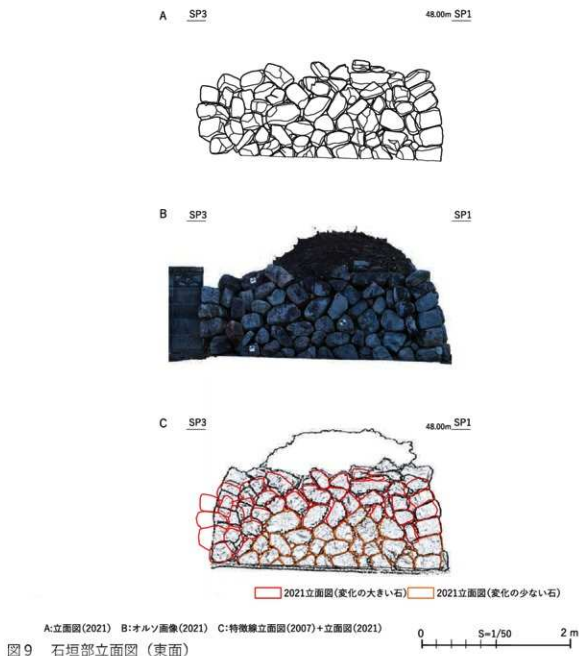
図7 石垣部平面図



る南側は著しく高さがなく、削平されたと考えられる。

2007年と2021年の3次元測量調査を比較すると(図8・9)、北面では東側の端部、特に上位が大きくずれていることが認められる。また、裏込石が露出している箇所は裏込石の崩落が進んでいることが確認できる。一方、東日本大震災等度重なる地震があったにも関わらず、これらを除き、北面中央部は石垣面が安定した状態であることが確認できる。この安定した箇所については、上部に天端石があり、崩れた東端には天端石が失われている。この天端石がないことが崩落の一要因と考えられる。

また、北面では上部に樹木があるが、この樹木の影響による石垣面の変化は大きくなかった。樹木による影響が全くないとは言えないものの、樹木が石垣面の崩落を緊急的に引き起こすも



のではないと考えられる。

東面では両端と上部に大きなずれが生じている。東面は石垣の端部にあたり、最もひずみが生じやすいと考えられる。2007年の測量記録がないものの、南面も大きく崩れたことは写真の比較から確認できる。南面は建物に接しており、近代以降の人為的改変も多かったと考えられる。これらはいずれも天端石が失われていると考えられる。2021年の測量調査後の宮城県沖地震による崩落は、この2007年から2021年において変化の大きな部分において起きている。

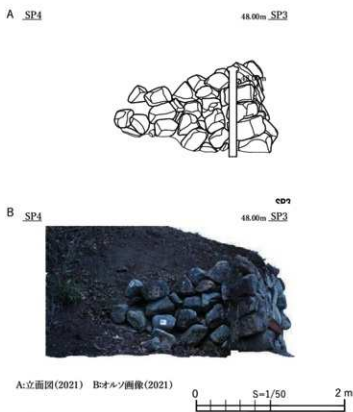


図10 石垣部立面図（南面）

2021年宮城県沖地震の崩落後、ずれが生じた石を除去し、土手の断ち割り調査を行った（図6・12）。1～10層は締まりが極めて弱く、空缶などの近代の遺物が含まれていることから、近代の石垣修復の際の埋土と考えられる。黒色を基調とする20・21層は土手構築前の旧表土である。11～19層は黒色を基調としながらも、ローム粒、ロームブロックを多く含み、淘汰が悪いことから、人為的な積土層と考えられる。中央部に落ち込んだ堆積がみられることから、中央部を浅く掘り込み、その後構築した可能性が指摘できる。

このことから、今回崩落した東端部は少なくとも昭和時代後期に修復が行われており、中央部下位のみ構築時の積土層が残されているものと考えられる。よって、今回崩落した石垣面はほぼ、近代の修復によるもので、江戸時代の本来の石垣面は根石付近を除き、残存していないものと判断された。なお、所有者等に修復についての聞き取りを行ったが、修復時期等について明確にすることはできなかった。

断ち割り調査後、石除去部には土嚢で養生を施す応急措置を行った。これらの調査成果をもとに、石垣の修復を令和4（2022）年3月1日～4日まで実施している。修復にあたっては、崩落した石垣面が近代の所産であること、安全面に配慮する必要があることを前提とし、2007・2021測量成果をもとにできるだけ原位置に復元を行った。修復後の同年3月16日には、M7.4、南相馬市原町区は震度6弱を観測する2022年福島県沖地震が発生した。その際には幸いにも石垣の崩落は発生しなかった。

## 7. 調査所見



図11 修復範囲図

#### 第1項 羽山岳の木戸跡（3次調査）

東日本大震災から2021年宮城県沖地震までの地震被害は、主に石垣の東面・南面が中心であった。崩落した箇所は天端石がなく、このことら、ゆがみが生じつつあったところに地震による崩落が起きたと考えられる。しかし、崩落しなかった北面石垣については、2007年以降、度重なる地震を経ながらも、大きなずれが生じず、安定した状態であることが確認された。これらのことは各時期に3次元測量を行っていたことにより、容易に確認することができることであり、3次元測量が石垣の保存検証について有効であることが改めて指摘できる。また、測量成果は、石垣の修復においても重要な基礎資料となった。さらに、あまり記録することがない裏込め石の露出部分も時間的経過により大きく崩れてきていることが判明し、今後の保存についての別の課題を認識することができたのも3次元測量の成果といえる。

また、修復前に行った断ち割り調査により、今回の崩落部分は石垣が過去に修復された箇所であることが確認された。このことから、石垣を正確な構築時の復元ではなく、原位置に戻すことを前提としながらも、安全面を重視した修復とすることを基本方針とした。どの段階の石垣に修復するのかを決定することについては、安全面だけではなく、経費・労力も大きく左右する。これらも基礎となる遺跡の情報を確認することが重要であり、修復時の調査は必須であるともいえよう。

今回の調査を踏まえ、今後の市指定史跡として適切に保存していくこととして、次のことが必要と考えられる。

- ・天端石がないところに天端石を設置し、石垣を安定させること。
- ・裏込め石の露出部分は、これ以上の崩落を防ぐため、盛土等の養生が必要であること。
- ・経年変化を確認するため、定期的な3次元測量を行うこと。

これらのことは、今後も予想される災害への対応であるとも言えよう。

#### 参考文献

南相馬市教育委員会(2007)南相馬市内遺跡発掘調査報告書3－平成17・18年度試掘調査報告一、南相馬市埋蔵文化財調査報告書第8集

南相馬市教育委員会(2008)南相馬市内遺跡発掘調査報告書4－平成19年度試掘調査報告一、南相馬市埋蔵文化財調査報告書第10集

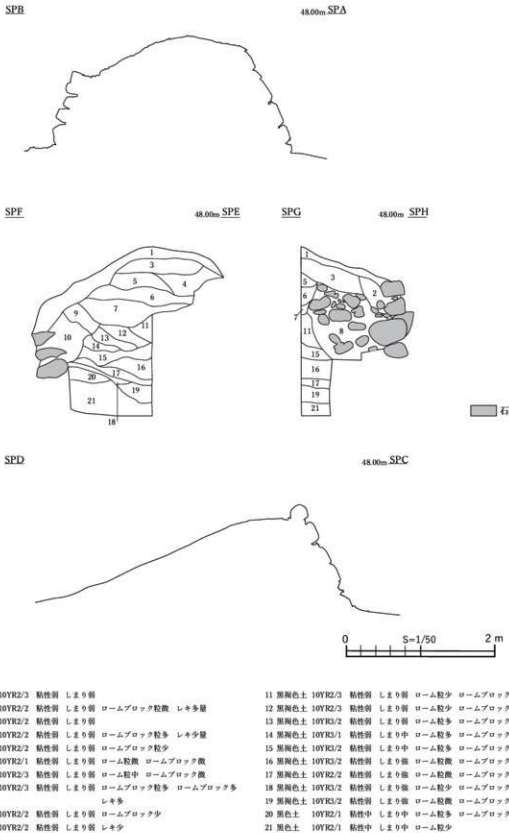


図 12 断面図

第1項 羽山岳の木戸跡（3次調査）



写真1 宮城県沖地震被害状況（東面）



写真2 宮城県沖地震被害状況（東面）



写真3 宮城県沖地震被害状況（南面）



写真4 宮城県沖地震被害状況（北面）



写真5 石取り上げ後状況1



写真6 石取り上げ後状況2



写真7 石取り上げ後状況3



写真8 石取り上げ後状況4





写真9 調査状況1



写真10 調査状況2



写真11 土手断面 (E-F)1



写真12 土手断面 (E-F)2



写真13 土手断面 (G-H)1



写真14 土手断面 (G-H)2



写真15 掘削作業完了状況1



写真16 掘削作業完了状況2

第1項 羽山岳の木戸跡（3次調査）



写真 17 応急措置状況



写真 18 復元作業状況 1



写真 19 復元作業状況 2



写真 20 復元作業状況 3



写真 21 復元作業状況 4



写真 22 復元完了（南面）



写真 23 復元完了（北面）



写真 24 復元完了（東・北面）

## 第2項 萱浜原畑遺跡（4次調査）

1. 調査原因：個人住宅の建築
2. 所在地：南相馬市原町区萱浜字原ノ山
3. 調査期間：令和3年6月9日
4. 対象面積：223㎡
5. 調査面積：18㎡
6. 調査担当：埋蔵文化財調査員 濱須 脩
7. 調査成果：調査対象範囲内に長さ9m×幅2mの調査区1箇所を設定して、埋蔵文化財の有無を確認した。試掘調査では、現地表面から約1～1.2mの深さで基盤層に達した。基盤層上面を確認する過程では、遺構・遺物等の埋蔵文化財は確認されなかった。
8. 調査所見：今回の試掘調査では、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから、改めた保存協議の必要はないが、工事施工にあたっては慎重工事により対応することが望ましい。



写真 25 1T 調査状況

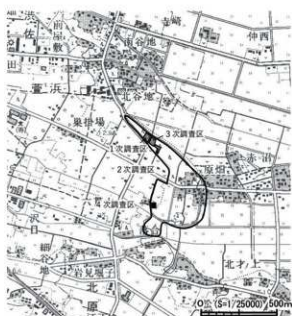


図 13 萱浜原畑遺跡位置図

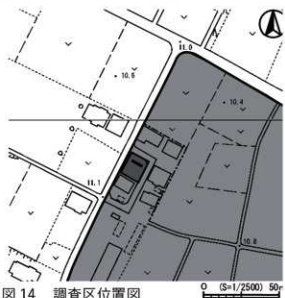


図 14 調査区位置図



写真 26 土層断面

### 第3項 羽山B遺跡

1. 調査原因：太陽光発電設備の建設
2. 所在地：南相馬市原町区片倉羽山
3. 調査期間：令和3年6月10日
4. 対象面積：1158 m<sup>2</sup>
5. 調査面積：2 m<sup>2</sup>
6. 調査担当：埋蔵文化財調査員 濱須 脩
7. 調査成果：調査対象範囲内に1m四方の調査区1箇所を設定して、埋蔵文化財の有無を確認した。

試掘調査では、現地表面から約50cmの深さで基盤層に達した。現地表面から基盤層までの堆積土は造成による盛土であり、基盤層上面を確認する過程では、遺構・遺物等の埋蔵文化財は確認されなかった。

8. 調査所見：今回の調査では、埋蔵文化財は確認されなかったことから、保存協議は不要であるが、周知の埋蔵文化財包蔵地内における工事であることから、工事の際には埋蔵文化財担当職員の出立ちの下で施工されることが望ましい。



図15 羽山B遺跡位置図

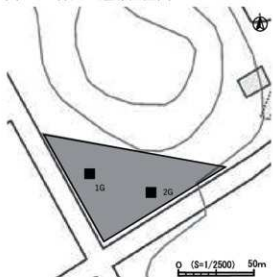


図16 調査区位置図



写真27 1G調査状況



写真28 2G調査状況

## 第4項 片草南原遺跡（4次調査）

1. 調査原因：太陽光発電設備の建設
2. 所在地：南相馬市小高区片草南原
3. 調査期間：令和3年6月10日
4. 対象面積：989 m<sup>2</sup>
5. 調査面積：14 m<sup>2</sup>
6. 調査担当：埋蔵文化財調査員 濱須 脩
7. 調査成果：調査対象範囲内に7 m×2 mの調査区1箇所を設定して、埋蔵文化財の有無を確認した。試掘調査では、現地表面から約45～75 cmの深さで基盤層に達した。L Iは造成による盛土層で、その下層で基盤層となる黄色ソフトロームに達した。

基盤層を確認する過程では、遺構・遺物等の埋蔵文化財は確認されなかった。

8. 調査所見：今回の試掘調査では、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから、改めた保存協議の必要はないが、工事施工にあたっては慎重工事により対応することが望ましい。

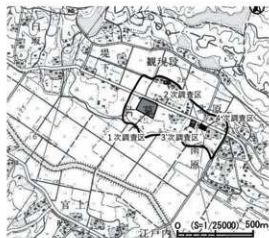


図17 片草南原遺跡位置図

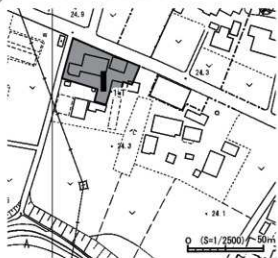


図18 調査区位置図



写真29 調査状況



写真30 土層断面

第5項 松ヶ沢A遺跡（2次調査）

1. 調査原因：太陽光発電設備の建設
2. 所在地：南相馬市原町区小木迫字松ヶ沢
3. 調査期間：令和3年6月15日～7月15日
4. 対象面積：49,698㎡
5. 調査面積：132.4㎡
6. 調査担当：埋蔵文化財調査員 濱須 脩
7. 調査成果：調査対象範囲内に幅1mの調査区を42箇所に設定して、埋蔵文化財の有無を確認した。試掘調査では、廃滓場1箇所と木炭焼成土坑1基が確認された。廃滓場は東向きに開析した谷頭部分にあり、26～28T・30Tで確認した。木炭焼成土坑は廃滓場のある谷の北側の谷に設定した39Tで確認した。廃滓場は鉄滓が分布する範囲を保存協議対象範囲とするが、39Tで確認した木炭焼成土坑については、確認調査で記録作成まで行ったことから、保存協議の対象からは除外することとした。



図19 松ヶ沢A遺跡位置図

8. 調査所見：今回の調査では、開発対象地内で廃滓場が所在していることから、確認された埋蔵文化財の保護が困難な場合には、記録保存のための発掘調査を要する。

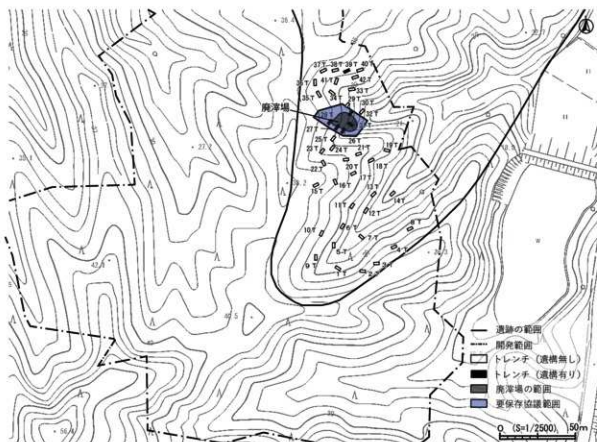


図20 調査区・遺構分布図



写真 31 27 T 廃滓場南端



写真 32 28 T 廃滓場西端



写真 33 31 T 廃滓場中央



写真 34 30 T 廃滓場北端



写真 35 39 T 木炭焼成土坑検出状況



写真 36 39 T 木炭焼成土坑完掘状況

第6項 白幡前遺跡（3次調査）

1. 調査原因：太陽光発電設備の建設
2. 所在地：南相馬市小高区大井字上山畑
3. 調査期間：令和3年7月20・21日
4. 対象面積：490 m<sup>2</sup>
5. 調査面積：30 m<sup>2</sup>
6. 調査担当：埋蔵文化財調査員 濱須 脩
7. 調査成果：調査対象範囲内に、長さ15 m×幅2 mの規模の調査区を設定して、埋蔵文化財の確認作業を行った。試掘調査では、現地表面から約40～50 cmの深さで黄色ロームの基盤層に達し、基盤層確認までの堆積土は暗褐色の畑地耕作土である。基盤層を確認するまでの過程の中では、少量の土器片が出土したが、いずれも畑地耕作土に含まれており、基盤層上面からは時期不明の幅1 m前後の溝跡2条を確認した。
8. 調査所見：今回の試掘調査では、2条の溝跡と少量の土器片が出土したものの、本工事においては確認された遺構への影響は極めて軽微と判断されることから、工事の際には埋蔵文化財担当職員との立ち会いの下で施工されることが望ましい。



図21 白幡前遺跡位置図



図22 調査区位置図



写真37 調査状況



写真38 土層断面



## 第7項 真野古墳群B地区（3次調査）

1. 調査原因：個人住宅の建設
2. 所在地：南相馬市鹿島区小池字長沼
3. 調査期間：令和3年7月28・29日
4. 対象面積：574 m<sup>2</sup>
5. 調査面積：40 m<sup>2</sup>
6. 調査担当：南相馬市博物館 主査 荒淑人
7. 調査成果：調査対象範囲内に、長さ10 m×幅2 mの規模の調査区を2か所に設定して、埋蔵文化財の確認作業を行った。試掘調査では、現地表面から約1～1.2 mの深さで黄色ロームの基盤層に達した。

2Tでは時期不明の竪穴住居跡の北西コーナーと考えられる遺構を確認したが、1Tでは明らかな遺構は確認できなかった。また基盤層に達するまでの堆積土からは3点の土師器片が出土した。

8. 調査所見：今回の試掘調査では、竪穴住居跡の一部と思われる遺構と、土師器片が3点出土したことから、本工事において建物基礎が基盤層に達する計画の場合には、保存協議を要する。



図23 真野古墳群B地区位置図

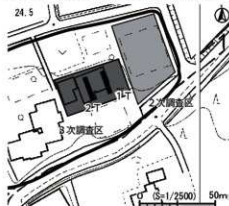


図24 調査区位置図



写真39 1T調査状況



写真40 2T調査状況

第8項 高見町B遺跡（7次調査）

1. 調査原因：建充分譲
2. 所在地：南相馬市原町区高見町一丁目
3. 調査期間：令和3年8月24日
4. 対象面積：495㎡
5. 調査面積：26㎡
6. 調査担当：埋蔵文化財調査員 濱須 脩
7. 調査成果：調査対象範囲内に、長さ7m×幅2mの調査区と長さ6m×幅2mの調査区を設定して、埋蔵文化財の確認作業を行った。

試掘調査では、現地表面から約0.4～0.75mの深さで黄色ロームの基盤層に達した。基盤層確認までの堆積土は、L Iは山砂による盛土、L IIは山砂盛土以前の耕作土である。

1 Tでは溝跡の南辺を確認したが、遺物等は出土しなかったことから時期は不明である。

2 Tでは遺構は確認できなかった。

8. 調査所見：今回の試掘調査では、溝跡の可能性のある掘り込みを確認したことから、工事施工が基盤層に達する計画の場合には、保存協議を要する。



図25 高見町B遺跡位置図

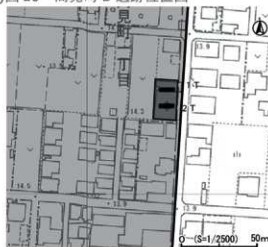


図26 調査区位置図



写真41 1T調査状況



写真42 2T調査状況

## 第9項 東町遺跡（5次調査）

1. 調査原因：個人住宅の建築
2. 所在地：南相馬市原町区東町二丁目
3. 調査期間：令和3年8月26日
4. 対象面積：148 m<sup>2</sup>
5. 調査面積：12 m<sup>2</sup>
6. 調査担当：埋蔵文化財調査員 濱須 脩
7. 調査成果：調査対象範囲内に、長さ6 m×幅2 mの調査区を設定して、埋蔵文化財の確認作業を行った。試掘調査では、現地表面から約60cmの深さで黄色ソフトロームの基盤層に達した。

基盤層確認までの堆積土は、L Iは砕石、L IIは盛土、L IIIは堆積土であり、基盤層に達するまでの過程では、遺構・遺物等は確認できなかった。

8. 調査所見：今回の試掘調査では、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから、改めた保存協議の必要はないが、工事施工にあたっては慎重工事により対応することが望ましい。



図27 東町遺跡位置図

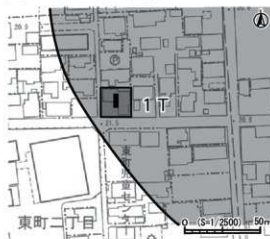


図28 調査区位置図



写真43 調査状況



写真44 土層断面

第10項 八幡林遺跡（20次調査）

1. 調査原因：集合住宅の建築
2. 所在地：南相馬市鹿島区寺内字八幡林
3. 調査期間：令和3年9月27日～11月28日
4. 対象面積：2,863 m<sup>2</sup>
5. 調査面積：262 m<sup>2</sup>
6. 調査担当：埋蔵文化財調査員 濱須 脩

7. 調査成果：調査対象範囲内に、16ヶ所の調査区を設定して確認作業を行い、遺構の検出状況にあわせて、随時拡張を行った。試掘調査では、現地表面から約30cmの深さで黄色ソフトロームの基盤層に達し、円墳5基を確認した。

1号墳：1・2Tで確認した円墳である。確認した範囲は周溝の北側部分であり、周溝上端の最大幅は約4mを計測する。想定される墳丘は直径約20mである。

2号墳：7・15Tで確認した円墳である。確認した範囲は周溝の西側部分であり、周溝上端の最大幅は約4mを計測する。想定される墳丘は直径約10mである。

3号墳：3・4・5Tで確認した円墳である。確認した範囲は周溝の東側部分であり、周溝上端の最大幅は約5mを計測する。想定される墳丘は直径約13mである。

4号墳：9Tで確認した円墳である。確認した範囲は周溝の南側部分であり、周溝上端の最大幅は約1.5mを計測する。想定される墳丘は直径約5mである。

5号墳：11・12Tで確認した円墳である。確認した範囲は11Tで周溝東側部分、16Tで周溝東側部分である。調査区では周溝の外周を確認することはできなかったことから、周溝の幅は不明である。想定される墳丘は直径約10mである。

出土遺物：試掘調査では、縄文土器・土師器（甕・高坏）・須恵器（甕）等が出土したが、いずれも表土やカクランから出土しており、古墳にともなうと考えられるものはない。出土した土師器には、古墳時代前期に位置づけられるものが多く、須恵器は9世紀頃のものである。

8. 調査所見：今回の試掘調査では、5基の円墳が確認された。想定される墳丘規模は最も小



図29 八幡林遺跡位置図

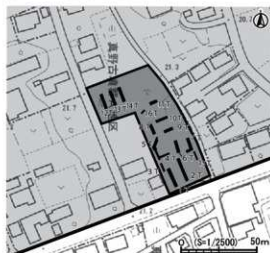


図30 調査区位置図

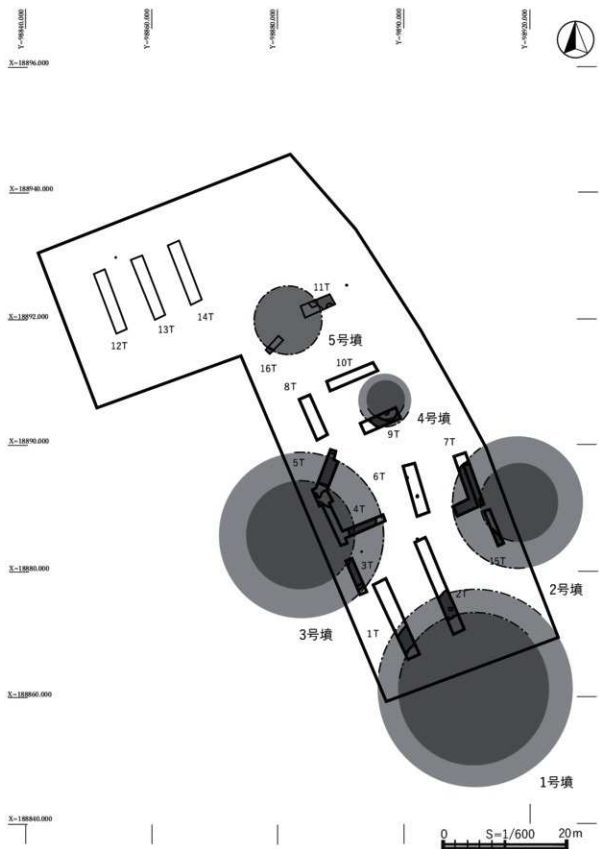


图 31 古墳分布図

第10項 八幡林遺跡（20次調査）

規模な4号墳が5m、最も大規模な1号墳が20mを計測し、墳丘規模に大小が認められた。また、調査区内に密集する状態で分布していることが確認された。

出土遺物には縄文土器、古墳時代前期頃の土師器、9世紀頃の須恵器があり、周囲には縄文時代・古墳時代前期・9世紀頃の遺構が分布している可能性が高い。

このような調査所見から、当該地において遺構確認面まで工事施工が達する場合には、記録保存のための発掘調査を要するとともに、国史跡真野古墳群を構成する古墳であることから、史跡の追加指定等の恒久的な保護措置を検討する必要がある。



写真45 1T（1号墳）調査状況



写真46 2T（1号墳）調査状況



写真47 3T（3号墳）調査状況



写真48 5T（3号墳）調査状況



写真 49 7T (2号墳) 調査状況



写真 50 15T (2号墳) 調査状況



写真 51 9T (4号墳) 調査状況



写真 52 11T (5号墳) 調査状況



写真 53 16T (5号墳) 調査状況



写真 54 作業風景

第11項 荒神前遺跡（10次調査）

1. 調査原因：個人住宅の建築
2. 所在地：南相馬市小高区片草字荒神前
3. 調査期間：令和3年11月15日
4. 対象面積：667 m<sup>2</sup>
5. 調査面積：26 m<sup>2</sup>
6. 調査担当：埋蔵文化財調査員 濱須脩
7. 調査成果：調査対象範囲内に、長さ2 m×幅1 mの調査区と、長さ12 m×幅2 mの調査区を配置して、埋蔵文化財の確認を行った。

調査区の基本土層は、LⅠは碎石を含む表土であり、LⅡは表土の下層にある黄色ソフトローム層である。基盤層を確認する過程では、遺構・遺物等の埋蔵文化財は確認されなかった。

8. 調査所見：今回の試掘調査では、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから、改めた保存協議の必要はないが、工事施工にあたっては慎重工事により対応することが望ましい。

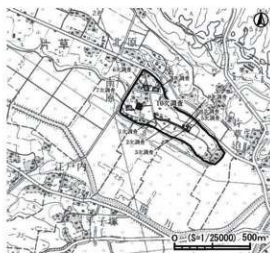


図32 荒神前遺跡位置図

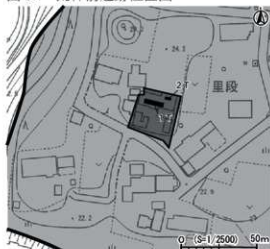


図33 調査区位置図



写真55 1T調査状況



写真56 土層断面



## 第12項 北原貝塚（6次調査）

1. 調査原因：県道広野・小高線建設
2. 調査地点：南相馬市小高区浦尻字滝ヶ迫地内
3. 調査期間：

令和3年11月8日～令和5年1月14日

4. 対象面積：1,657.53 m<sup>2</sup>
5. 調査面積： 36.7 m<sup>2</sup>
6. 調査担当：

課長補佐兼埋蔵文化財担当係長 川田 強  
埋蔵文化財調査員 濱須 脩

7. 調査成果：調査は福島県教育委員会令和3年

度調査における遺物包含層検出地点の再調査と未試掘調査地区を対象に行った。調査区の付番は福島県教育委員会令和3年度調査に続けて行った。なお、17・18Tは令和2年度調査区を拡張した調査区であり、20～25Tが本調査で新たに実施した調査区である。

17・18・21Tで縄文時代の遺物包含層を確認した。本調査地区の北側にあたる22Tでは表土下約50cm、南側にあたる23・24Tでは、表土下30～50cmで遺構確認面である黄褐色砂質シルト層を確認した。22～24Tでは縄文～平安時代に堆積した遺物包含層や遺構は検出されなかった。これらの調査により、当該遺物包含層の範囲は南北約70mにわたることが把握された。また、本調査地区の斜面下にあたる現市道の西側にあたる25Tでは、少量の土師器、縄文土器が出土した。しかし、これらは表土下の2層（図38）からの散漫な出土が主体であり、流れ込みと考えられ、平安時代以前の遺構・堆積層は存在しないと判断できる。このことから、1次調査等で確認された貝層・遺物包含層は現道より東側で取束するものと想定される。

確認された遺物包含層は、22Tでは上面での検出にとどめ、17・18Tでは、掘削して遺物包含層の厚さ、堆積状況を確認する調査を実施した。

17T 1～4層は淘汰が悪く、斜面上位からの崩落土と考えられる。調査区西側に堆積する5～7層は黒色を基調とした砂質シルト～シルト～シルト質砂であり、湧水も認められる。斜面に平行した堆積であり、谷部に堆積した湿地性の自然堆積土と考えられる。主体となる土器は縄文時代前期中葉の大木2a、2b式である。上位の5層等では少量の土師器や縄文時代後期の土器が含まれている。下位の6・7層では縄文時代前期中葉の土器に限られており、縄文時代前期が主な堆積時期と考えられる。

17Tの西側斜面下位には、黄褐色シルトを含む8・9層が堆積する。上位の5～7層、下位の10層は黒色基調砂質シルトであり、層境が明確である。8・9層は淘汰が悪く偽礫を多く含むこと、ラミナ状の堆積を示さないことから人為的な堆積土と判断した。上下層に湧水の影響が認められる堆積物であることから、湧水箇所における整地層と想定される。



図34 北原貝塚位置図

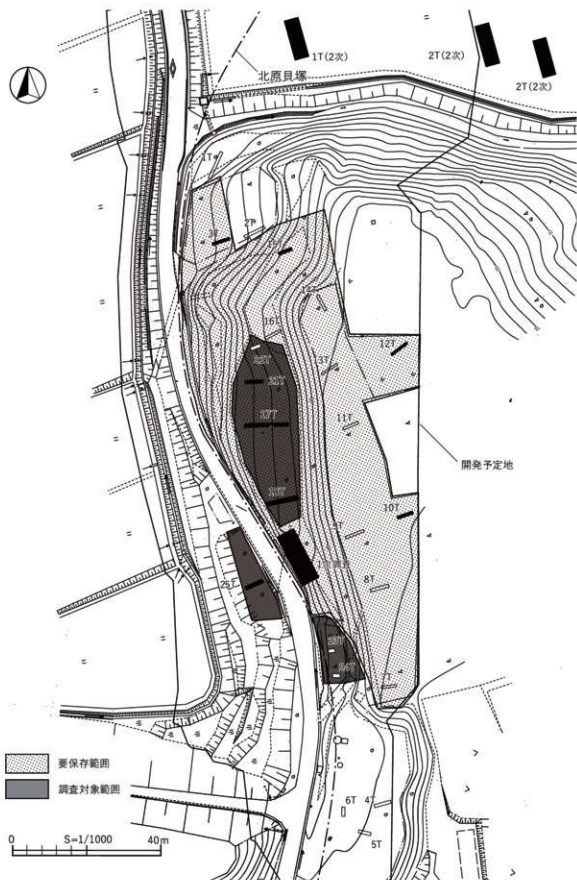


図 35 北原貝塚調査場所図面

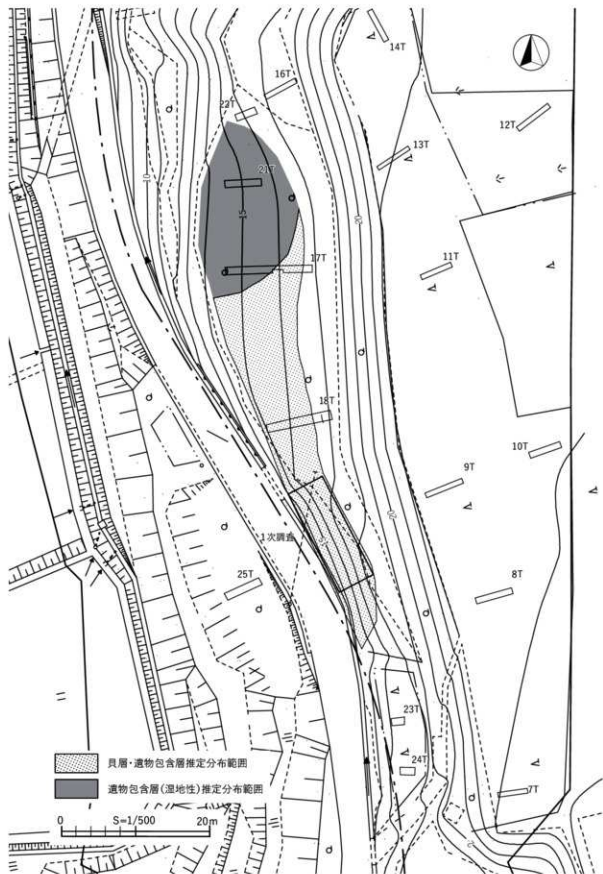


図 36 北原貝塚調査場所図面

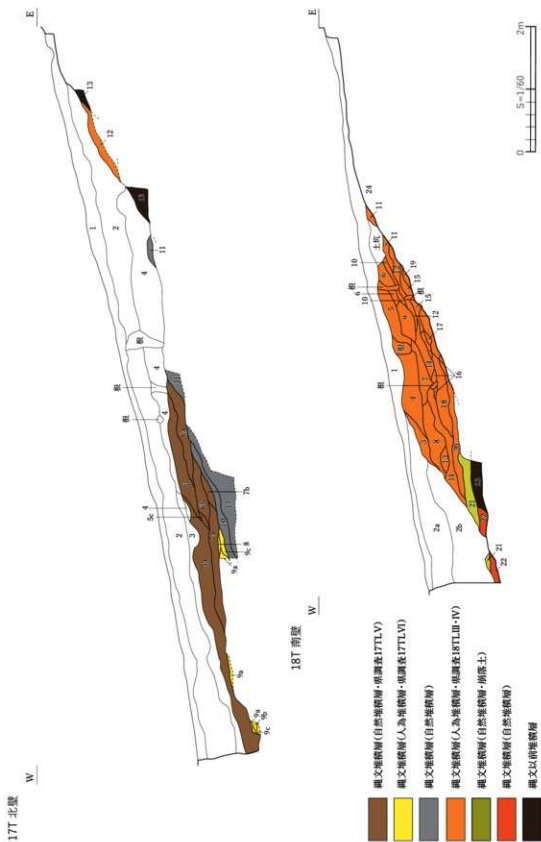
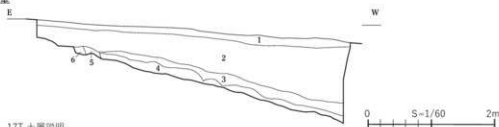


图 37 北原貝塚調査断面图 (1)

## 25T 南壁



## 17T 土層説明

1 (L.I)	黒褐色砂質シルト 10YR2/3	海況悪	炭化物 1 ~ 2mm
2 (L.II)	暗褐色砂質シルト 10YR3/3	海況悪	炭化物 1 ~ 2mm
3 (L.III)	黒褐色砂質シルト 10YR2/2	海況悪 土層あり	炭化物 1 ~ 3mm
4	黄褐色シルト質砂 10YR5/6	海況悪	炭化物 1 ~ 3mm
5a (L.V)	黒色砂質シルト 10YR2/1	海況やや悪 土層あり	炭化物 1 ~ 10mm 焼土粒 2 ~ 5mm 魚鱗 3 ~ 5mm 多角
5b (L.V)	黒色シルト 10YR1.7/1	海況やや悪	炭化物 1 ~ 5mm 焼土粒 1 ~ 3mm
5c (L.V)	黒色砂質シルト 10YR1.7/1	海況悪	炭化物 1 ~ 3mm 焼土粒 1 ~ 3mm
6a (L.V)	暗褐色シルト質砂 10YR3/4	海況悪 土層あり	炭化物 1 ~ 2mm 焼土粒 2 ~ 5mm
6b (L.V)	黒褐色砂質シルト 10YR3/2	海況悪 土層あり	炭化物 2 ~ 15mm 焼土粒 1 ~ 2mm
7a	黒褐色砂質シルト 10YR2/2	海況やや悪 土層あり	炭化物 1 ~ 3mm 焼土粒 2 ~ 4mm 魚鱗 2 ~ 10mm 多角
7b	暗褐色砂質シルト 10YR3/3	海況やや悪 土層あり	炭化物 1 ~ 6mm 焼土粒 1 ~ 5mm
8	黒褐色シルト 10YR2/2	悪	炭化物 1 ~ 8mm 焼土粒 1 ~ 5mm 魚鱗 1 ~ 8mm 多角
9a	にぶい黄褐色シルト 10YR5/3	海況やや悪 土層あり	炭化物 1 ~ 22mm 焼土粒 1 ~ 10mm 魚鱗 1 ~ 16mm 多角
9b	暗褐色シルト 10YR3/3	海況悪 土層あり	炭化物 1 ~ 22mm 焼土粒 1 ~ 8mm 魚鱗 2 ~ 8mm 多角
9c	灰黄褐色シルト 10YR4/2	海況悪 土層あり	炭化物 1 ~ 4mm 焼土粒 1 ~ 2mm 魚鱗 2 ~ 4mm 多角
10	黒褐色砂質シルト 10YR3/2	海況悪 土層あり	炭化物 2 ~ 16mm 焼土粒 1 ~ 2mm
11 (L.VI)	灰黄褐色砂質シルト 10YR4/2	海況悪 土層あり	炭化物 1 ~ 2mm
12	暗褐色シルト 10YR3/4	海況悪 土層あり	炭化物 1 ~ 20mm 焼土粒 1 ~ 3mm 魚鱗 3 ~ 20mm 多角
13	褐色シルト 10YR4/6	海況良	

## 18T 土層説明

1 (L.D)	暗褐色砂質シルト 10YR 3/3	海況悪	炭化物 1 ~ 2mm
2a (L.II.a)	暗褐色砂質シルト 10YR 3/4	海況悪	炭化物 1 ~ 2mm
2b (L.II.b)	黒褐色砂質シルト 10YR 2/3	海況悪	炭化物 1 ~ 2mm
3 (L.III)	黒色シルト 10YR 2/2	海況やや悪 土層あり	炭化物 1 ~ 3mm 焼土粒 1 ~ 4mm 魚鱗 1 ~ 4mm 多角
4 (L.IV)	黒褐色シルト 10YR 2/3	海況やや悪 土層あり	炭化物 1 ~ 7mm 焼土粒 1 ~ 13mm 魚鱗 1 ~ 5mm 丸
5 (L.V)	暗褐色シルト 10YR 3/3	海況悪 土層あり	炭化物 1 ~ 8mm 焼土粒 1 ~ 5mm 魚鱗 1 ~ 6mm 丸
6 (L.VI)	黒褐色シルト 10YR 2/3	海況悪 土層あり	炭化物 1 ~ 4mm 焼土粒 1 ~ 4mm 魚鱗 1 ~ 5mm 多角
7 (L.VI)	黒褐色シルト 10YR 2/2	海況悪 土層あり	炭化物 3 ~ 20mm 焼土粒 1 ~ 2mm 魚鱗 1 ~ 10mm 多角
8 (L.VI)	暗褐色シルト 10YR 3/3	海況やや悪 土層あり	炭化物 1 ~ 6mm 焼土粒 1 ~ 2mm 魚鱗 1 ~ 3mm 多角
9 (L.VI)	黒褐色シルト 10YR 2/3	海況やや悪 土層あり	炭化物 2 ~ 10mm 焼土粒 1 ~ 20mm 魚鱗 1 ~ 2mm 多角
10 (L.VI)	暗褐色シルト 10YR 3/3	海況悪	炭化物 1 ~ 10mm 焼土粒 1 ~ 2mm 魚鱗 1 ~ 8mm 丸
11 (L.VI)	黒褐色シルト 10YR 2/2	海況悪	炭化物 1 ~ 5mm 焼土粒 1 ~ 3mm 魚鱗 1 ~ 3mm 多角
12 (L.VI)	暗褐色シルト 10YR 3/4	海況悪 土層あり	炭化物 3 ~ 10mm 焼土粒 2 ~ 4mm 魚鱗 2 ~ 5mm 多角
12 (L.VI)	暗褐色シルト 10YR 3/3	海況悪	炭化物 3 ~ 20mm 焼土粒 1 ~ 2mm 魚鱗 2 ~ 10mm 多角
14 (L.VI)	黒褐色シルト 10YR 2/3	海況やや悪 土層あり	炭化物 2 ~ 10mm 焼土粒 1 ~ 2mm 魚鱗 2 ~ 30mm 多角
15 (L.VI)	暗褐色シルト 10YR 3/3	海況悪 土層あり	炭化物 2 ~ 13mm 焼土粒 1 ~ 5mm 魚鱗 1 ~ 3mm 丸
16 (L.VI)	褐色シルト 10YR 4/6	海況やや悪	炭化物 1 ~ 10mm
17 (L.VI)	黒褐色シルト 10YR 2/3	海況悪	炭化物 1 ~ 20mm 焼土粒 1 ~ 2mm 魚鱗 1 ~ 5mm 丸
18 (L.VI)	暗褐色シルト 10YR 3/4	海況やや悪 土層あり	炭化物 2 ~ 12mm 焼土粒 1 ~ 2mm 魚鱗 1 ~ 10mm 多角
19 (L.VI)	褐色シルト 10YR 4/4	海況やや悪	炭化物 1 ~ 10mm 焼土粒 1 ~ 3mm 魚鱗 1 ~ 5mm 丸
20 (L.VI)	黒褐色シルト 10YR 2/3	海況悪 土層あり	炭化物 1 ~ 40mm 焼土粒 1 ~ 4mm 魚鱗 1 ~ 3mm 多角
21	褐色砂質シルト 10YR 4/6	海況悪	炭化物 1 ~ 2mm 魚鱗 1 ~ 10mm 多角
22	暗褐色シルト 10YR 2/4	海況やや悪 土層あり	炭化物 1 ~ 5mm 魚鱗 1 ~ 5mm 丸
23	褐色砂質シルト 10YR 4/6	海況良	

## 25T 土層説明

1	表土		
2	暗褐色砂質シルト	10YR3/4	基土層。
3	黒褐色砂質シルト	10YR2/3	砂多量。褐色土ブロック・炭化物少量。焼土微量。土層出土。
4	暗褐色砂質シルト	10YR3/3	
5	黒褐色砂質シルト	10YR2/3	褐色土ブロック少。炭化物・焼土粒少量。
6	褐色シルト・シルト質砂	10YR4/6	

( ) 層名は令和3年度福岡県教育委員会調査の記載層位に対応する。

図 38 北原貝塚調査断面図 (2)

10・11層は斜面に平行する黒色基調の堆積土である。湧水が認められる。縄文時代前期中葉の遺物が出土することから、前期中葉以降の谷部の堆積土と考えられる。

17T12層、18T 3～20層は黄褐色偽礫や炭化粒、焼土粒を多く含み、多量の縄文土器が出土する。褐色基調と黒色基調の堆積土を挟むなど複雑な堆積を示すこと、遺構確認面とした黄褐色砂質シルトに起因する偽礫を多く含むことから、人為的な埋め土が主体と考えられる。18Tでは厚い堆積を示し、最大厚85cmを測る。土器の出土量も多く、図42-1など大形破片も含まれている。類似した人為的堆積土は隣接する浦尻貝塚（南相馬市教育委員会2005・2008）、片草貝塚（南相馬市教育委員会2019）で確認されており、貝塚に伴うまたは貝塚との一連の土廃棄層と評価されている。当該地点においても隣接する1次調査でイボキサゴを主体とする貝塚が確認されており、浦尻貝塚等と同様の状況と位置付けられる。

18Tでは人為的な埋土と考えられる20層下に褐色砂質シルトの淘汰の悪い21層が堆積している。土器や焼土粒の出土量が少なく、基盤の黄褐色砂質シルトの崩落土と考えられる。その下位の少量の縄文土器を含む暗褐色砂質シルトの22層は斜面に平行する堆積であることから、自然堆積層と考えられる。縄文時代前期の段階で地すべりが発生し、その後、土廃棄が行われた過程が想定される。

出土遺物を図39～43に示した。21・24・25Tではロクロ成形の9世紀代の土師器が出土している（図43-13～15）。平安時代の遺構等は確認されていない。主体となるのは17・18・22Tの遺物包含層から出土した縄文土器である。少量の縄文時代後期（図39-1・2）、中期（同図-3）、早期（図42-3）の土器が出土しているものの、最も多いのは縄文時代前期中葉にあたる大木2a式（図39-13、図42-1等）である。上位層からは大木2b式（図41-1、7等）、浮島・諸磯式（同図-4・5）がある。福島県教育委員会令和3年度調査において、18Tの遺物包含層上位層である6層を掘り込む土坑からは大木2b式が多く出土しており（福島県教育委員会2023）、土廃棄による当該遺物包含層は大木2a式期が主な形成時期と考えられる。

1次調査では、これに先立つループ文を多く残す縄文時代前期前葉にあたる広義の宮田III群土器（竹島1975）が主体となって出土している。このことから、1次調査で確認した貝層は、本調査地点の遺物包含層に先行すると位置付けられる。

その他、3点の石器が出土している。図43-10・11は縄文時代の所産、同図12は端部に穿孔があり、石庖丁が転用された磨石と考えられる。12は側面も研磨されている。

8. 調査所見：今回の試掘調査では、縄文時代前期中葉を中心とする遺物包含層が確認された。この包含層は1次調査を含めた遺跡西部にあたる貝層を含めた一連の縄文時代前期の包含層と考えられる。これまでの調査を概観すると、斜面上位にあたる1次調査地点で前期前葉にイボキサゴを主体とする貝層が形成された後、前期中葉に18T付近を中心に人為的な土廃棄が行われる。より斜面下位の17T西側、22T周辺では土の廃棄、貝塚の形成が及ばず、湧水のある湿地性の遺物包含層が形成される。また、この湧水地点では当該期の整地層が確認された。

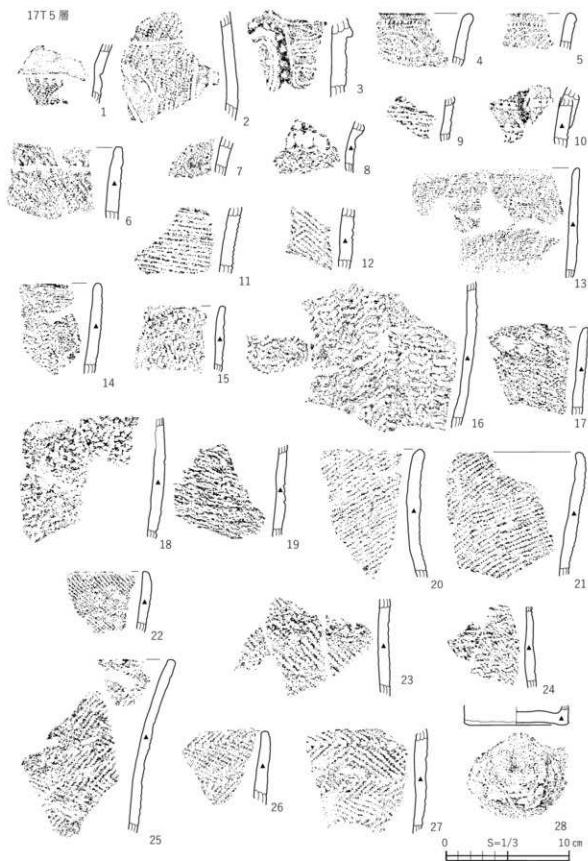


図 39 北原貝塚出土遺物 (1)

このように検出された遺物包含層は貝塚と一連の形成と考えられ、保存状況も良好である。また、湧水地点の整地はいわゆる水場遺構の存在も想定され、本遺跡の縄文遺跡としての重要性は高いと評価できる。

出土土器は縄文時代早期、中期、後期も少量あり、縄文時代を通じて遺構等が存在する可能性がある。また、9世紀代の土師器も出土しており、北原貝塚は平安時代の遺跡であるということも新たに確認された。

開発区域では未調査地区もあり、今後の保存協議は追加調査をもって判断されることとなる。しかし、本遺跡は国史跡浦尻貝塚に先行する貝塚を伴う遺跡であることは確実であり、貝塚を伴う通時的な遺跡群を構成する将来にわたり保存すべき重要遺跡とも評価できるため、本遺跡における開発計画に際しては、遺跡の重要性を考慮した保存協議が必要である。

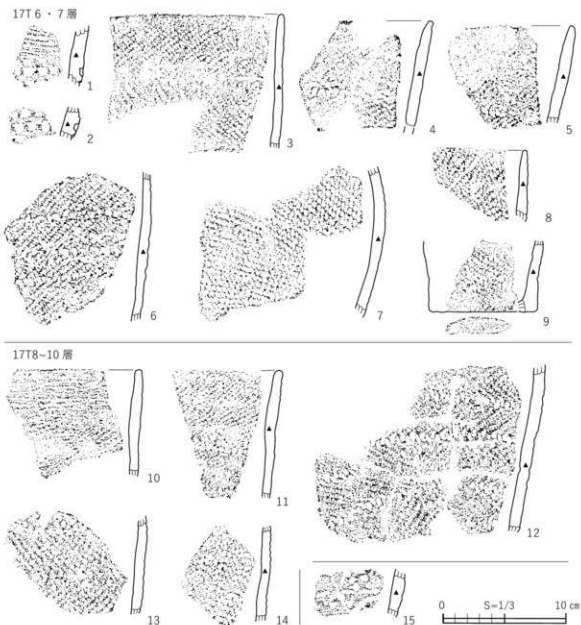


図40 北原貝塚出土遺物（2）



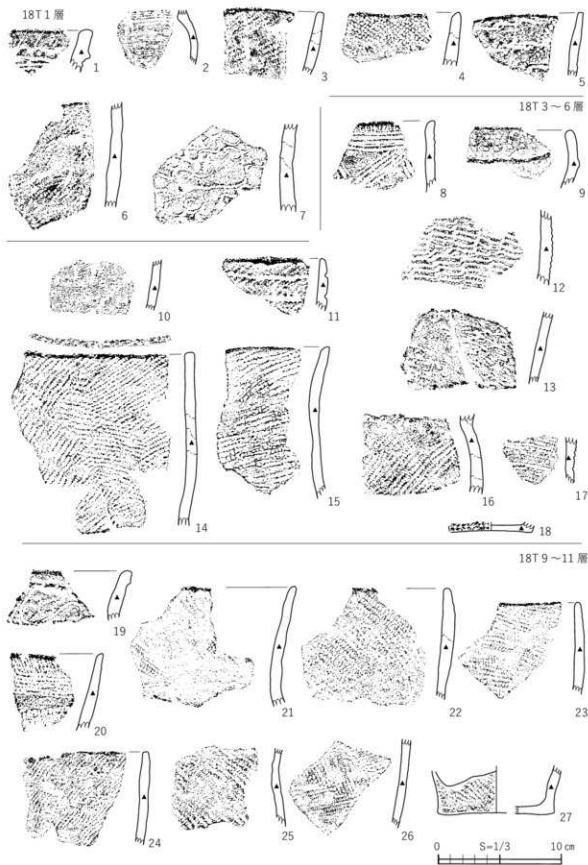


図41 北原貝塚出土遺物(3)

18T14~18層

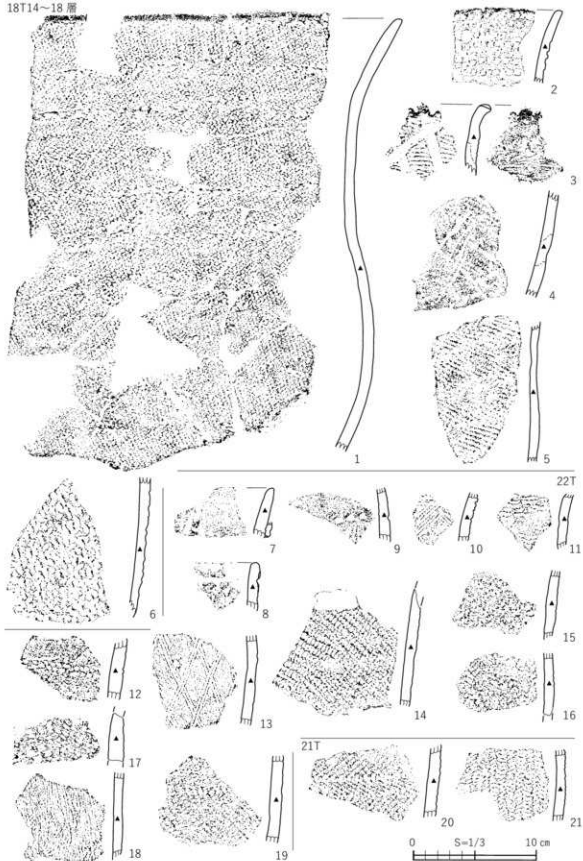


図42 北原貝塚出土遺物（4）

参考文献

小高町教育委員会 (2001) 小高町内埋蔵文化財調査報告, 小高町文化財調査報告書第2集

小高町教育委員会 (2004) 北原貝塚遺跡群, 小高町文化財調査報告書第5集

小高町教育委員会 (2005) 浦尻貝塚1, 小高町文化財調査報告書第6集

福島県教育委員会 (2023) 東日本大震災復興関連遺跡調査報告9, 福島県文化財調査報告書第561集

南相馬市教育委員会 (2008) 浦尻貝塚3, 南相馬市埋蔵文化財調査報告書第11集

南相馬市教育委員会 (2019) 南相馬市内遺跡発掘調査報告書12 - 平成29年度試掘調査報告 -, 南相馬市埋蔵文化財調査報告書第28集

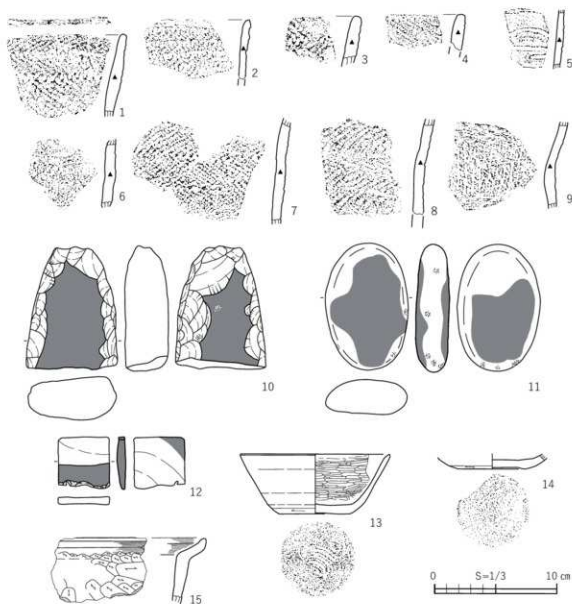


図43 北原貝塚出土遺物(5)



写真 57 17T 全景（西から）



写真 58 17T 北側壁面堆積状況（西から）.



写真 59 17T 北側壁面堆積状況（東から）



写真 60 21 T 全景（東から）



写真 61 18T 全景（東から）



写真 62 18T 全景 (西から)



写真 63 18T 南側壁面堆積状況 (1)



写真 64 18T 南側壁面堆積状況 (2)



写真 65 18T 遺物出土状況 (1)



写真 66 18T 遺物出土状況 (2)



写真 67 22T 全景 (西から)



写真 68 23 T (西から)



写真 69 25T 全景 (東から)

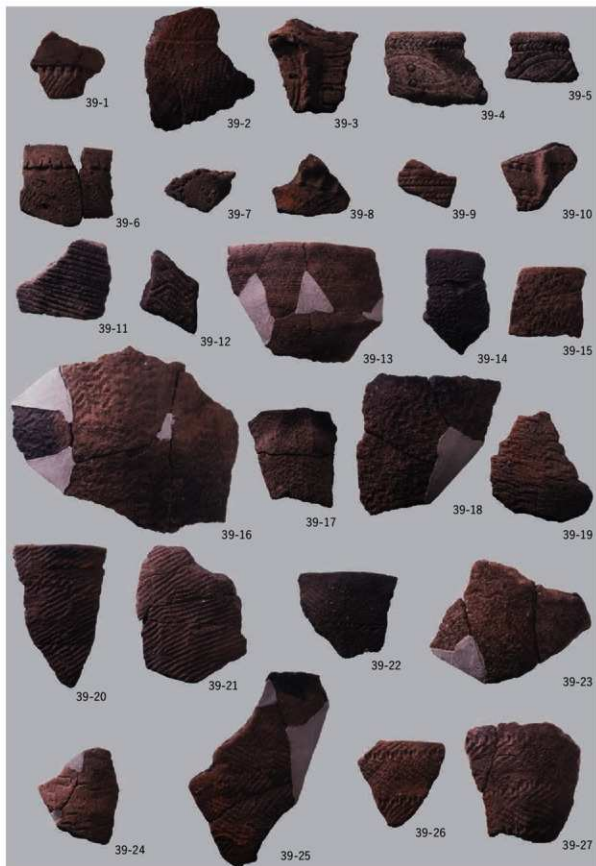


写真 70 出土遺物（1）



写真 71 出土遺物 (2)



写真 72 出土遺物（3）



採肉番号	肉内番号	調査区	出土位置	部類	口径 (cm)	底径 (cm)	胎高 (cm)	残存率 (%)	外面	内面	底部	備考
29	1	17T	5層	縄文土器					横位LR縄文、皮張、棒状工具刺突	ミガキ		
29	2	17T	5層	縄文土器					横位・斜位LR縄文、未調整片縄文、磨滑	ミガキ		
29	3	17T	5層	縄文土器					刺突付隆帯、押引沈線文	ナデ		
29	4	17T	5層	縄文土器					木葉文、爪形文、平行沈線文、門形竹管文	ミガキ		
29	5	17T	5層	縄文土器					木葉文、爪形文、平行沈線文	ミガキ		
29	6	17T	5層	縄文土器					棒状工具刺突→棒状工具刺突・縦位LR縄文	ナデ		横線
29	7	17T	5層	縄文土器					門形竹管文	ナデ		
29	8	17T	5層	縄文土器					押印、横位直前段台橋	ナデ		横線
29	9	17T	5層	縄文土器					爪形文	ナデ		
29	10	17T	5層	縄文土器					刺突付隆帯、爪形文	ナデ		横線
29	11	17T	5層	縄文土器					手載竹管による横位沈線文	ナデ		
29	12	17T	5層	縄文土器					山形平行沈線文、横位LR縄文	ミガキ		横線
29	13	17T	5層	縄文土器					押引平行沈線文、磨蝕沈線文(小波状文、ロソバス文)	ナデ		横線
29	14	17T	5層	縄文土器					横位横向ループ文	ケズリ		
29	15	17T	5層	縄文土器					直前段台橋?	ナデ		横線
29	16	17T	5層	縄文土器					横位横向ループ文	ミガキ		横線
29	17	17T	5層	縄文土器					横位直前段台橋	押印・ナデ		横線
29	18	17T	5層	縄文土器					横位横向ループ文	ナデ		横線
29	19	17T	5層	縄文土器					横位直前段台橋	ミガキ		横線
29	20	17T	5層	縄文土器					横位LR縄文	ナデ		横線
29	21	17T	5層	縄文土器					横位LR縄文	ミガキ		横線
29	22	17T	5層	縄文土器					横位LR縄文	ミガキ		横線
29	23	17T	5層	縄文土器					横位LR縄文、結帯縄文	ナデ		横線
29	24	17T	5層	縄文土器					横位LR縄文、結帯縄文	ミガキ		横線
29	25	17T	5層	縄文土器					横位結帯器付縄文(0段多条?)	ナデ		横線
29	26	17T	5層	縄文土器					横位結帯LR・RL引状縄文	ミガキ		横線
29	27	17T	5層	縄文土器					横位結帯LR・RL引状縄文	ミガキ		横線
29	28	17T	5層	縄文土器					縄文?	ナデ	ナデ	横線
40	1	17T	6層	縄文土器		8.4			爪形文、横位平行沈線文	ミガキ		横線
40	2	17T	6層	縄文土器					爪形文	ミガキ		横線
40	3	17T	6層	縄文土器					横位結帯0段多条(R)・LR引状縄文	ミガキ		横線
40	4	17T	6層	縄文土器					横位ループ付LR縄文	ナデ		横線
40	5	17T	6層	縄文土器					横位ループ付LR縄文	ナデ		横線
40	6	17T	6層	縄文土器					横位ループ付LR縄文	ナデ		横線
40	7	17T	6層	縄文土器					横位LR縄文	ミガキ		横線
40	8	17T	7層	縄文土器					横位LR縄文	ミガキ		横線
40	9	17T	7層	縄文土器		8.6			横位LR縄文	ナデ	ナデ	横線
40	10	17T	10層	縄文土器					横位良器赤文	ケズリ・ナデ		横線
40	11	17T	8層	縄文土器					横位LR縄文、ナデ滑	ミガキ		横線
40	12	17T	6層	縄文土器					横位結帯0段多条(R・L)引状縄文	ミガキ		横線
40	13	17T	10層	縄文土器					横位横向ループ文	ミガキ		横線
40	14	17T	9層	縄文土器					横位結帯0段多条(R・L)引状縄文	ミガキ		横線
41	1	18T	1層	縄文土器					斜位短沈線、押印隆帯、平行沈線文	ナデ		横線
41	2	18T	1層	縄文土器					手載竹管による刺突付、棒状沈線文、押引沈線文	ナデ		横線
41	3	18T	1層	縄文土器					横位LR縄文	ナデ		横線
41	4	18T	1層	縄文土器					横位直前段台橋	ナデ		横線
41	5	18T	1層	縄文土器					横位直前段台橋、結帯縄文	ナデ		横線
41	6	18T	1層	縄文土器					横位LR縄文?	ナデ		横線
41	7	18T	1層	縄文土器					S字状通孔文	ミガキ		横線
41	8	18T	4層	縄文土器					縦位縦短沈線、横位平行沈線、山形平行沈線文	ミガキ		横線
41	9	18T	6層	縄文土器					横位刺突列、隆帯	ミガキ		横線
41	10	18T	6層	縄文土器					磨蝕小波状沈線文	ナデ		横線
41	11	18T	4層	縄文土器					横位LR縄文、押印LR縄文	ミガキ		横線
41	12	18T	6層	縄文土器					四五状赤文	ナデ		横線
41	13	18T	6層	縄文土器					横位直前段台橋	ナデ		横線
41	14	18T	3層下	縄文土器					横位LR縄文・1物L具縄文	ミガキ		横線
41	15	18T	6層	縄文土器					横位LR縄文	ケズリ・ナデ		横線
41	16	18T	6層	縄文土器					横位LR縄文	ナデ		横線
41	17	18T	4層	縄文土器					横位通孔刺突列	ミガキ		横線
41	18	18T	4層	縄文土器					横位通孔刺突列	ナデ	ナデ	横線
41	19	18T	9層	縄文土器		5.8			手載竹管による刺突列、押印隆帯、沈線、門形竹管文	ナデ		横線
41	20	18T	9層	縄文土器					縦位短沈線、爪形文(交互刺突)、手載竹管工具による刺突文	ミガキ		横線
41	21	18T	9層	縄文土器					横位LR縄文、ナデ滑	ナデ		横線
41	22	18T	9層	縄文土器					横位LR縄文、ナデ滑	ナデ		横線
41	23	18T	9層	縄文土器					斜位LR縄文	ミガキ		横線
41	24	18T	10・11層	縄文土器					横位LR縄文、結帯縄文	ナデ		横線
41	25	18T	10・11層	縄文土器					横位LR縄文、ナデ滑	ナデ		横線
41	26	18T	9層	縄文土器					横位結帯LR・RL引状縄文、結帯縄文	ナデ		横線
41	27	18T	9層	縄文土器					横位LR縄文	ナデ	ナデ	横線
42	1	18T	14層	縄文土器			9.4		横位直前段台橋	ミガキ		横線
42	2	18T	18層	縄文土器					手載竹管による横位刺突列	ミガキ		横線 横線 植付孔
42	3	18T	18層	縄文土器					1物棒状工具による刺突条痕、棒状工具による棒状沈線	横線		横線

第12項 北原貝塚（6次調査）

調査区	国内番号	調査区	出土位置	層	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	残存率 (%)	外面	内面	底部	備考
42	4	18T	14層	縄文土層					横位 瓦、縄文	ミガキ	横位	
42	5	18T	14層	縄文土層					ループ付瓦、縄文	ミガキ	横位	
42	6	18T	15層	縄文土層					横位断面ループ文	ミガキ	横位	
42	7	21T	3層	縄文土層					横位押付段帯、横位直段台形	ミガキ	横位	
42	8	21T	3層	縄文土層					横位切欠、縄文	ミガキ	横位	
42	9	21T	3層	縄文土層					横位割栗列、多条沈線	ナデ	横位	
42	10	21T	3層	縄文土層					横位山形沈線文	ミガキ	横位	
42	11	21T	3層	縄文土層					横位押し沈線文	ナデ	横位	
42	12	21T	3層	縄文土層					横位、斜位割栗列	ナデ	横位	
42	13	21T	3層	縄文土層					平截竹筒による平行沈線、押し沈文	ナデ	横位	横位庄目あり
42	14	21T	3層	縄文土層					横位直段台形	ミガキ	横位	
42	15	21T	3層	縄文土層					横位断面ループ文	ナデ	横位	
42	16	21T	3層	縄文土層					横位断面ループ文	ミガキ	横位	
42	17	21T	3層	縄文土層					押し割栗列	ミガキ	横位	
42	18	21T	5層	縄文土層					横位断面文	ミガキ	横位	
42	19	21T	3層	縄文土層					横位、斜位 瓦、縄文	ナデ	横位	
42	20	22T	2層	縄文土層					非鉛筆引状縄文（0段多条L・折）	ミガキ	横位	
42	21	22T	2層	縄文土層					断面ループ文	ミガキ	横位	
43	1	25T	一括	縄文土層					横位鉛筆引状縄文（L形・瓦、フ）口唇キザミ	ミガキ	横位	
43	2	25T	2層	縄文土層					横位ループ付L形縄文	ミガキ	横位	
43	3	25T	2層	縄文土層					横位鉛筆引状縄文（L形・瓦、フ）	ミガキ	横位	
43	4	25T	2層	縄文土層					横位 瓦、縄文	ミガキ	横位	
43	5	25T	4層	縄文土層					沈線	ナデ	横位	
43	6	25T	一括	縄文土層					横位直段台形	ミガキ	横位	
43	7	25T	2層	縄文土層					横位鉛筆引状縄文（L形・瓦、フ）、鉛筆縄文	ナデ	横位	
43	8	25T	2層	縄文土層					横位L形縄文、鉛筆縄文	ミガキ	横位	
43	9	25T	3層	縄文土層					横位斜位割栗文、鉛筆縄文?	ナデ	横位	
43	13	21T	5層	土師器坪	12	5.6	4.6	30%	口～胴部：ロクロナデ 底部下段：回転ヘラケズリ	ミガキ、黒色粘土質		回転糸切り、外周回転ヘラケズリ
43	14	24T	一括	土師器坪		5.6		30%	胴部：ロクロナデ 底部下段：回転ヘラケズリ	ミガキ、黒色粘土質		回転糸切り
43	15	25T	5層	土師器甕					口：ロクロナデ 胴～胴部：ヘラケズリ	ロクロナデ、ナデ		

調査番号	国内番号	調査区	出土位置	種類	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	備考
43	10	17T	3層	磨石（打製石斧）	105	73	34		花崗岩	転用。
43	11	17T	9層	磨石・磨石	104	67	26		花崗岩	
43	12	17T	一括	磨石（石竜丁）	44	42	7		粘板岩	穿孔あり、転用。

## 第13項 長野南原遺跡（5次調査）

1. 調査原因：特別養護老人ホーム増床
2. 所在地：南相馬市原町区長野南原
3. 調査期間：令和3年12月15日～12月24日
4. 対象面積：3,905 m<sup>2</sup>
5. 調査面積：320 m<sup>2</sup>
6. 調査担当：埋蔵文化財調査員 濱須 脩
7. 調査成果：調査対象範囲内に、長さ10m×幅2mの調査区を16箇所配置して、埋蔵文化財の確認を行った。調査区の基本土層は、L Iは畑地耕作土による表土で、L II・IIIは黒褐色の堆積土である。基盤層はL III下層にある黄色ソフトローム（L IV）もしくは段丘堆積による砂礫層（L V）である。部分的にL IVが失われL Vが見られることから、後世に削平を受けている可能性が高い。

試掘調査では1・12 Tで竪穴住居跡を確認した。また1・10・11・14 Tではピットを確認している。基盤層を確認する過程では遺物は出土しなかった。

8. 調査所見：今回の試掘調査では、竪穴住居跡2軒・ピット17基を確認したことから、工事施工が基盤層に達する計画の場合には、保存協議を要する。



図44 長野南原遺跡位置図

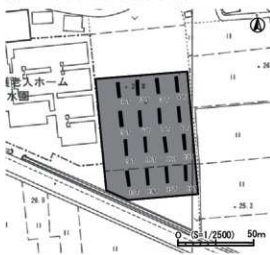


図45 調査区位置図



写真73 調査区遠景



写真74 重機掘削状況

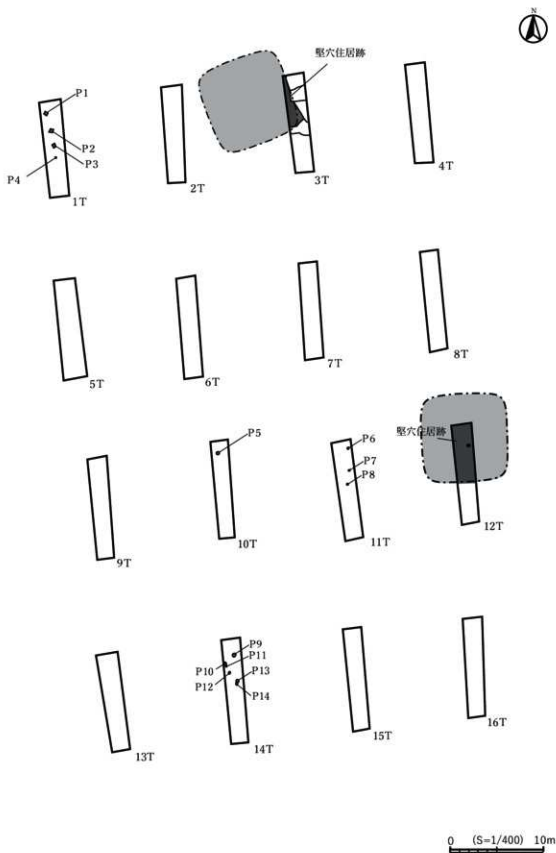


図 46 遺構配置図



写真 75 3T 調査状況



写真 76 12T 調査状況



写真 77 3T 土層断面



写真 78 12T 土層断面



写真 79 1T 調査状況



写真 80 14T 調査状況

### 第14項 北原田B遺跡

1. 調査原因：個人住宅建築
2. 所在地：南相馬市原町区北長野字北原田
3. 調査期間：令和3年12月13日
4. 対象面積：1,352㎡
5. 調査面積：40㎡
6. 調査担当：埋蔵文化財調査員 演須 脩
7. 調査成果：調査対象範囲内に、長さ10m×幅2mの調査区を2箇所配置して、埋蔵文化財の確認を行った。調査区の基本土層は、L Iは黒褐色土の表土で、L IIは黄褐色ロームブロックを含む盛土、L IIIは基盤層となる砂礫層である。基盤層は表土面から約60cmの深さで確認した。試掘調査対象範囲では、基盤層の黄褐色ソフトロームが欠層し、段丘堆積による砂礫層が基盤層となっていることから、後世に大規模な造成が行われた可能性が高い。

基盤層を確認する過程のなかで、遺構・遺物の埋蔵文化財は確認できなかった。

8. 調査所見：今回の試掘調査では、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから、改めた保存協議の必要はないが、工事施工にあたっては慎重工事により対応することが望ましい。



図47 北原田B遺跡位置図



図48 調査区位置図



写真81 1T調査状況



写真82 2T調査状況

## 第15項 西迫東迫横穴墓群

1. 調査原因：道路敷設
2. 所在地：南相馬市原町区雫字東迫
3. 調査期間：令和4年1月12日～2月10日
4. 対象面積：12,000 m<sup>2</sup>
5. 調査面積：68.5 m<sup>2</sup>
6. 調査担当：主任学芸員 荒淑人

7. 調査成果：調査対象範囲内に、任意の規模の調査区を15箇所配置して、埋蔵文化財の確認を行った。調査区の基本土層は、L Iは腐葉土の表土で、L IIは堆積土・L IIIは地山ブロックを含む崩落土、L VIが基盤層となる黄褐色泥岩の岩盤である。基盤層はL III下層にある黄色ソフトローム（L IV）もしくは段丘堆積による砂礫層（L V）である。

調査区は、微地形の観察で窪地となっている部分に、等高線に平行となるように設定し、最終的には目視できるものを含めて13基の横穴墓を確認した。

確認された横穴墓は、南東方向に開析した小支谷を1つの単位として、3グループで構成されていることが判明した。

最も南端にある谷では、1号墓、中央の谷では2～6号墓、北側の谷では7～13号墓が分布している。

8. 調査所見：今回の試掘調査では、道路建設範囲において13基の横穴墓が分布していることが確認されたことから、工事施工においては道路法線の変更等により横穴墓を保存することが望ましいが、計画変更が困難な場合には、記録保存のための発掘調査を要する。

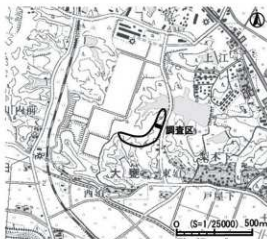


図49 西迫東迫横穴墓群位置図

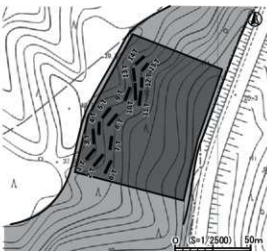


図50 調査区位置図

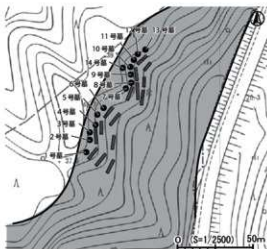


図51 横穴墓分布図



写真 83 1T調査状況



写真 84 1号墓検出状況



写真 85 3T調査状況



写真 86 3号墓検出状況



写真 87 5号墓前庭部検出状況





写真 88 10号墓開口状況

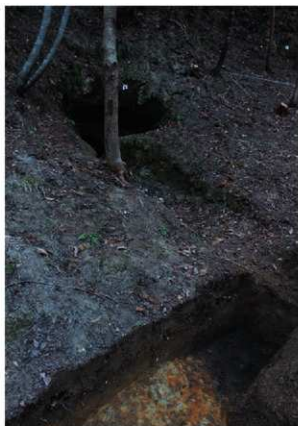


写真 89 10号墓前庭部



写真 90 12T 調査状況



写真 91 10T 基本土層



写真 92 作業風景



写真 93 作業風景

第16項 反町遺跡

1. 調査原因：防火貯水槽設置
2. 所在地：南相馬市鹿島区南屋形字反町
3. 調査期間：令和4年3月9日
4. 対象面積：30㎡
5. 調査面積：6㎡
6. 調査担当：埋蔵文化財調査員 濱須 脩
7. 調査成果：調査対象範囲内に、長さ3m×幅1mの調査区を2箇所に配置して、埋蔵文化財の確認を行った。調査区の基本土層は、LⅠ～Ⅲは黒褐色土の耕作土（表土）で、LⅣは暗褐色の堆積土、LⅤは基盤層となる黄褐色粘土層である。基盤層は表土面から約25cmの深さで確認した。試掘調査では、LⅠ～Ⅲから少量の土師器・須恵器が出土したが、保存協議を要する埋蔵文化財は確認できなかった。
8. 調査所見：今回の試掘調査では、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから、改めた保存協議の必要はないが、工事施工にあたっては工事立会により対応することが望ましい。



図52 反町遺跡位置図



図53 調査区位置図



写真94 1T調査状況



写真95 2T調査状況

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	みなみそうましないいせきはつくつちょうさほうこくしょ16
書名	南相馬市内道跡発掘調査報告書16
副書名	令和3年度試掘調査報告
シリーズ名	南相馬市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第40集
編著者名	川田強・荒瀬人
編集機関	福島県南相馬市教育委員会
所在地	〒975-0062 福島県南相馬市原町区本陣前一丁目70番地 TEL0244-24-5284
発行年月日	西暦2023（令和5年）3月31日

所 取 道 跡	所 在 地	コ ー 下 市 町 村 道 跡 番 号	北 緯		調 査 期 間	面 積 (㎡)	調 査 原 因
			東 経	上 段 : 差 下 段 : 実			
羽山岳の木戸跡	南相馬市原町区上太田字新橋	2 1 2 5 0 0 1 6 1	37° 36' 53"	140° 57' 21"	2 1 0 5 1 7 2 1 0 5 3 1	12	災害復旧
豊浜原畑道跡	南相馬市原町区豊浜字原ノ山	2 1 2 5 0 0 3 5 3	37° 37' 46"	141° 00' 12"	2 1 0 6 0 9 2 1 0 6 0 9	18	個人住宅
片草南原道跡	南相馬市小高区片草字南原	2 1 2 5 0 0 4 5 4	37° 34' 32"	140° 58' 17"	2 1 0 6 1 0 2 1 0 6 1 0	14	変電施設
羽山B道跡	南相馬市原町区片倉字羽山	2 1 2 5 0 0 3 2 9	37° 35' 40"	140° 54' 27"	2 1 0 6 1 0 2 1 0 6 1 0	2	太陽光発電
松ヶ沢A道跡	南相馬市原町区小木迫字松ヶ沢	2 1 2 5 0 0 6 9 4	37° 34' 41"	140° 59' 30"	2 1 0 6 1 5 2 1 0 7 1 5	132.4	太陽光発電
白幡前道跡	南相馬市小高区大井字上山畑	2 1 2 5 0 0 6 3 3	37° 34' 20"	141° 00' 28"	2 1 0 7 2 0 2 1 0 7 2 1	30	太陽光発電
真野古墳群B地区	南相馬市鹿島区小池字長沼	2 1 2 5 0 0 0 3 9	37° 41' 47"	140° 56' 38"	2 1 0 7 2 8 2 1 0 7 2 9	40	個人住宅
高見町B道跡	南相馬市原町区高見町一丁目	2 1 2 5 0 0 3 4 6	37° 38' 22"	140° 59' 22"	2 1 0 8 2 4 2 1 0 8 2 4	26	建売分譲
東町道跡	南相馬市原町区東町一丁目	2 1 2 5 0 0 1 7 0	37° 38' 35"	140° 57' 50"	2 1 0 8 2 6 2 1 0 8 2 6	12	個人住宅
八幡林道跡	南相馬市鹿島区寺内字八幡林	2 1 2 5 0 0 0 4 1	37° 41' 48"	140° 57' 17"	2 1 0 9 2 7 2 1 1 1 1 2	262	集合住宅
荒神前道跡	南相馬市小高区片草字一里段	2 1 2 5 0 0 5 1 2	37° 34' 23"	140° 58' 21"	2 1 1 1 1 5 2 1 1 1 1 5	27	個人住宅
北原貝塚	南相馬市小高区浦沢字滝ヶ畑	2 1 2 5 0 0 5 0 3	37° 31' 06"	141° 01' 46"	2 1 1 1 1 5 2 2 0 1 1 4	36.7	道路建設
北原田B道跡	南相馬市原町区北長野字北原田	2 1 2 5 0 0 2 8 3	37° 39' 33"	140° 56' 25"	2 1 1 2 1 3 2 1 1 2 1 3	40	個人住宅
長野南原道跡	南相馬市原町区長野字南原	2 1 2 5 0 0 4 4 6	37° 39' 04"	140° 56' 39"	2 1 1 2 1 5 2 1 1 2 2 4	320	特別養護老人ホーム増床
西迫東迫横穴墓群	南相馬市原町区雫字蛭沢	2 1 2 5 0 0 2 0 1	37° 36' 51"	140° 59' 37"	2 2 0 1 1 2 2 2 0 2 1 0	68.5	道路建設
反町道跡	南相馬市鹿島区南屋形字反町	2 1 2 5 0 0 6 8 6	37° 42' 31"	140° 58' 43"	2 2 0 3 0 9 2 2 0 3 0 9	6	防火貯水槽

所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
羽山岳の木戸跡	その他	近世	石垣		
菅浜原畑遺跡	散布地	弥生・古墳・奈良・平安			
片草南原遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安			
羽山B遺跡	集落	縄文			
松ヶ沢A遺跡	製鉄	平安	廃滓場・木炭焼成土坑		
白幡前遺跡	散布地	縄文・古墳			
真野古墳群B地区	古墳	古墳			
高見町B遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安			
東町遺跡	集落	縄文・平安			
八幡林遺跡	古墳・集落	縄文・弥生・古墳・平安	円墳5基	土師器・須恵器	
荒神前遺跡	集落	縄文・弥生・古墳・奈良・平安			
北原貝塚	集落・貝塚	縄文	貝層	縄文土器	
北原田B遺跡	散布地	奈良・平安			
長野南原遺跡	集落	平安	竪穴住居跡		
西迫東迫横穴墓群	古墳	古墳	横穴墓14基	須恵器	
反町遺跡	集落	弥生・古墳・平安			

---

印刷 2023年3月31日

発行 2023年3月31日

南相馬市埋蔵文化財調査報告書第40集

南相馬市内遺跡発掘調査報告書16

—令和3年度試掘調査報告—

編集 南相馬市教育委員会 文化財課

発行 南相馬市教育委員会

〒975-0062 福島県南相馬市原町区本陣前一丁目70番地

印刷 有限会社 愛原印刷所

〒975-0003 福島県南相馬市原町区栄町1-8

---